
空想未来小説

宇多瀬与力

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空想未来小説

【Nコード】

N5395N

【作者名】

宇多瀬与力

【あらすじ】

大正時代最後の夏の東京。無名作家の青年、賀集一喜は、一高生の友人、大正明治の付き添いで訪ねた岩倉家で、21世紀の女子高生、中沢菜々だと主張する少女、岩倉なな子と出会う。彼女の言葉を信じた賀集は、二人で21世紀を舞台にした小説を書くことを決める。

前口上・登場人物（前書き）

前口上

浪漫の大正か平成か。月が啼いたかホトトギス。時空を超えたか未来人は、中沢菜々。嘘も方便と謂うなれど、嘘が通じぬ青年は、作家志望の賀集一喜。浪漫も失せた大正末期の東京で二人が出会うとき、菜々の言葉を信じた賀集は物語を書く事となりますは、題して空想未来小説。

これより本編の始まりと相成りますが、先んじて執筆を縦書きで行っている故、パソコン閲覧の方は是非画面が右上にあります縦書表示。こちらを選んで頂きたいと、作者よりお願い申し上げます。

前口上・登場人物

登場人物

賀集かじゅう 一喜かずき

作家を目指す青年。18歳。

中沢なかざわ 菜々なな

2010年のごく普通の子供女子高校生。17歳。

岩倉いわくら なな子ななこ

岩倉家の末娘。17歳。

岩倉いわくら ゆき

岩倉家の三女。18歳。

岩倉いわくら 九胤くいん

東京帝国大学三年生。岩倉家の三男。21歳。

大正おほまね 明治めいじ

第一高等学校三年生。賀集の旧友。18歳。

和昭かずあき

物語の主人公。

成平なりひら

物語の主人公。

光昭みつあき

和昭の兄。

序

小さい頃、私の夢は未来の国からはるばると猫型ロボットに来てもらう事だった。

しかし、母子家庭で借家住まいの我が家には、引き出しのある勉強机はなかった。

私の抱いた最初の夢は、21世紀を向う前に儂くも散った。

「暑い……。お母さん、いい加減新しいエアコン買おうよ。」

その晩は、熱帯夜が多いと云われる今年の夏の中でも、特に暑かった。畳の敷かれた6畳の居間で、私は汗で首にはりつく長い髪の毛を払う様に団扇を仰ぎながら、隣の台所で夕飯を準備する母に懇願した。

居間の窓の上に神棚の如く掲げられたエアコンは、部屋の温度を調整するという本来与えられた役割を果たさずに、電気を喰い続ける穀潰しである為、去年の冬からコンセントが抜かれている。

「そんなお金があったら、この家賃を支払うわよ。」

リズムカルに包丁を叩く音を立てながら、母は返した。

六畳の居間と寝室、玄関と風呂、トイレが一つになっている我が家は、1LKと云えば聞こえはいいけれど、実態は築数十年のボロアパートの借家だ。しかし、そんな家でも、例えば川を挟んで目の前に千葉県があるうと、二階なのに窓からの景色が向いのビルの壁だけであるうと、東京都内というだけで結構な金額の家賃を取られ、現在家賃滞納2ヶ月目に突入している。

「やっぱり、バイトしよっか？」

私が少し砕けた口調で言うと、今まで室内に流れていた包丁の音が止んだ。

「菜々、あなたは勉強するのが仕事なのよ。」

「でも……。お母さん、昼もお仕事して、夜も飲み屋で働いているのよ？ 友達だって、コンビニとかでバイトしているし……。」

「他所は他所。うちのうち。それに、その友達はアルバイトしている分、予備校で勉強しているんでしょ？」

母は私に聞いた。私は思わず返事に困った。勿論、アルバイトをしている友達が全員予備校で勉強している訳でもない。予備校に通っている友達の中には、講義や自習をサポートしてアルバイトやその稼ぎで遊んでいる者もいる。

「それか、浪人が許されているんでしょ？」

私が返事に困った最大の理由を母はさらりと指摘した。私を大学へ通わせたいと生活を切り詰めて働く母の私に求めている事は一つだ。四年制大学への現役合格。それが、国公立であろうと、私大であろうと、母には些細な問題らしい。私大では学費もかかる。母の貯金で私を私立大学へ通わせるのは、非常に困難な事だろう。

しかし、私の成績では国公立は難しい。特に、社会科学科目と理科科目、英語が絶望的なのだ。得意な科目は、数学？Aと国語系科目だ。二次関数以降の数学と体育はあまり得意ではない。かといって、芸術系の才能があるわけでもない。

つまり、私、中沢菜々という人間は、非常に受験生向きの能力を持つ女子高生ではないのである。最適な職業は何かと考えると、いつも一つの答えに行き当たると。

「主婦」

「どうしたの？　ボーっとしちゃって……。暑さでやられた？」

いつの間にか、夕飯の支度を終えた母が、今のちゃぶ台に夕飯を並べていた。ちゃぶ台の上に散らばっていた菜々の鉛筆の汚れ一つない綺麗な問題集は畳に下ろされ、昼間仕事先で貰ったという菊とリンドウと百合の入った花瓶は窓際に移動されていた。それにしても、その花の組み合わせはお墓参りの花束に見えてしまう。……いや、もしかしたらそうなのかも。母よ、会社でイジメられているのか？

私の心配を他所に、当の本人はノンキに苦笑して私に言う。

「しっかりしてよ？　菜々は大学を出て、一流の会社で働くんだか

ら

「だから……、私は別にそれが夢なんじゃないんだから！」

私は何度も繰り返し返している問答を今夜も母に始めた。母が私に現実的に安定した将来を求め、私が反論する。そして、母はいつも私に聞くのだ。

「じゃあ、菜々の夢は何？ お母さん、菜々が本当にしたい事なら、反対しないわよ」

「……………」

答えられるはずはなかった。今の私に、将来の夢は、ないのだから。

「だったら、勉強をして。少しでもお金のかからない国公立大学に入って頂戴。別に東大なんていいませんよ」

母は、白髪染めクリームの臭いが残る体を私に近寄らせて言った。人工的に黒く染められた彼女の髪は、私には、起きようとせずに夢の中に居続ける様な、彼女の無理をした人生を表しているかの様に見えた。

「じゃ、戸締りを確りして寝るのよ」

夕食後、支度を整えた母が玄関で、寝間着姿の私に言った。私は呆れながら答える。

「もう、17歳の娘の留守番に言う台詞じゃないよ。お母さんこそ気をつけてね。いつも直ぐに一人で突っ走っちゃうんだから」

「ハイハイ」

「ハイは一回でしょ？」

「ハイ」

まるで幼い子どもの様なやり取りを終え、母は近所の飲み屋の仕事へ出かけた。

私は言いつけ通り、玄関の鍵を閉めた。襖を開け、居間のちゃぶ台を見下ろすと、例の花瓶の影にスカイブルーの携帯電話が置かれていた。

「あー……お母さん、ケータイ忘れてるよ。……まだ、間に合うな」

携帯電話を手に取った私は、振り向いて玄関を見ると呟いた。タンスの扉にハンガーで引つ掛けられた制服のシャツを羽織った。ズボンは、コスモス柄のパジャマのままだが、スカートを履く余裕はなかった。

サンダルを履いて玄関の鍵をかけた時、この中途半端な格好なら寝間着のままでも良かったのではないかと気がついたが、後の祭りだった。

「お母さん！」

私は部屋の前にある金属製の階段を、音を立てて駆け下りながら、母を呼んだ。しかし、母は既に家の路地を出た通りの信号を渡った後であった。

「あー、もう！ ここの階段、キツ過ぎ！」

私は転げ落ちそうになるのを何とか堪えて階段を降り終え、母の後を追って、通りに向かって路地を走った。

「おカーさん！ ケータイ忘れてえ………」

私は母に携帯電話を持つ手を振って呼びかけながら、路地から飛び出した。

「！」

その瞬間に、私が理解できた感覚は、聴覚を刺激するクラクシヨン、大きな二つの光。

私が、どの時点でそれをトラックであると判断できたのかは、わからない。しかし、その判断ができるよりも遙か先に、私の生まれ持った本能が、死を悟らせた。

私の名前が呼ばれ、死の順番が来た事を、何者かが私に伝えた。

何故か、その後に私を襲った苦しみは痛みではなかった。それは、覚えていないけれど、確かに経験していた感覚だった。全身が水に包まれる感覚。息苦しさと開放感。

ああ、生まれる時の感覚だ。

意識が、深く、深く見えない水底へ向って沈み、浮遊感が全身を支配した時、それを私は思った。
刹那、私の意識は無に帰した。

巻

「今朝、わざわざ電話がかかってきた時は何事かと思ったぞ」

賀集一喜は、国鉄上野駅の改札口で駅員に切符を渡すと、相変わらず人込みの中から目当ての男を見つけ、近づくに挨拶代わりの文句を言った。

相手の男、大正明治は、この仮駅舎内にも届く蝉時雨から想像される通りの真夏日にも関わらず、律儀にも学生帽を被り、紺色詰襟の学生服の上からマントを羽織っており、涼しげな印象を与える要素は素足で履く下駄のみだ。そして、ポケットからはみ出した軍手。一目で彼が第一高等学校の学生であるとわかる。

一方、賀集は立て襟の洋シャツに袴と袴で身を包み、黒縁の眼鏡と深く被ったハンチングという関東大震災以降、目に見えて減ってきた蛮力ラ姿であり、その印象の通り彼は、北の親元を離れ、東京の祖母の家で文学の勉強をしながら作家を夢見る齡十八の青年である。

「何事かと聞かれれば、正午に上野駅にて待つという事だ」

旧友は悪びれる様子もなく答えた。

「全く……。それで、何の用事だい？ 春から連絡の一つもよこさずに突然呼び出したんだ。まさか、ただ話をしに呼び出す事を口実に、自動電話をかけてみたと言うんじゃないだろうね？ わかってるだろうけど、君は本郷の寮からだから徒歩で来れるが、京橋に住んでいる自分は、鉄道に乗らなければならないのだからな」

「そんな愚考はしないさ。そもそも、来春から帝大工学部へ入学することがほぼ確実である二部三年生の俺が、年明けに開始された自動式の電話を使用しないとでも思うのかい？ 答えは否だ。君なら俺が言った事が嘘であるかの判断ができるだろう？」

大正は賀集に指を突きつけて言った。賀集は彼の瞳を見て、嘆息した。

「わかったよ。君は嘘をついていない。じゃあ、用件はなんだい？」
「そうだな。端的に言えば、これから人を訪ねに行くんだ。その人物が、空想小説とやらを書こうと模索している君の刺激になると思つてね。確かに連絡は寄こしてないが、君が執筆で行き詰っている事は風の便りで聞いているからね。……というのも、相手は正真正銘の良家で、流石に俺一人というのは気が乗らないんだ。そこで、君にも同行してもらおうと思つた訳だ。……詳しくは、歩きながら説明する。何、弥生と駒込の間、夏目漱石先生宅の近くだ。上野公園のバラックがなくなつた様を見て、帝都復興を実感しながら行くじゃないか」

大正は台詞と同時に賀集の肩に腕を回し、足を進めた。二人は上野駅を出て、上野公園の不忍池へ向つた。

時は、20世紀。西暦1926年、大正15年8月15日。激動と云われる大正時代最後の夏にして、後に起こる第二次世界大戦の終戦日と呼ばれることになる、比較的雲が多いにも関わらず暑い日であつた。

「岩倉家の名前に聞き覚えはないか？」

上野公園は、国鉄上野駅のほぼ北に位置し、二年前に宮内省から東京市に下賜された為、正しくは上野恩賜公園となつている。

園内の西側にある不忍池の外周を歩きながら、池の中にある島に建てられた入母屋造の不忍弁天堂を賀集が眺めていると、大正は言葉投げかけた。弁天堂に架かる観月橋を往来する人々の姿見える。

賀集は彼を一瞥し、答えた。

「貿易商だつたな、確か」

大正は頷いた。

「そうだ。何でも、先代が明治維新後の文明開化の波に乗り、貿易会社を立ち上げたのが起こりで、当初は名士の猿真似などと馬鹿にもされたそうだが、着実に事業を成功させていった。そして、あの大战で大儲けをし、今では邸宅を構えている」

「なるほど。して、我々は今、その岩倉邸へ向っているわけだな？」
大正の意図を指摘する賀集は、視線を再び弁天堂に戻していた。
参拝者の中には薄汚れた衣類に身を包む者もいる。震災で財産一切を失い、復興の波に乗れずにいるのだろうか。

「……………虚言を見抜く君には敵わないが、俺でも君が考えている事くらいはわかる。その詩的な思考で、未だ被災者という存在から抜け出せない者を美化して哀れんでいるのだろうか、俺にはアレが人間としての認識ができないな」

「哲学的な言い回しだな」

「科学を学ぶ者の見解かもしれないが、人間とは欲強い生物なんだ。どんな状況に陥っても、己をその現状に満足ができない。だからこそ、デモクラシーと云う社会の変化が生まれたんだと俺は考えている。如何なる時も、諦めない。それが生物としての人間のあり方だ」
「それなら、自分は人間から外れようとしているのかもな」

賀集が物淋しげな表情で呟いた。大正は彼の肩をポンと叩いた。
「君はまだ人間だ。事実、今も浮かばぬアイデアを捜し求めて、俺と行動を共にしている。……………さて、その参考になる様に、もう少しこれから向う要件について話しておこう」

二人は不忍池の外周を回り、根津へ向けて歩みを進める。

大正は視線を進行方向にある、茂みの先にある恩賜上野動物園に向けたまま話を続ける。

「岩倉の子供は七人いてな。その三男、確か第五子が、帝大工学部の三年で、最近俺と懇意にしてくれている。先日、その岩倉先輩の様子がおかしいと聞いてな。それとなく、先輩に聞いてみると、先月、末の妹が自殺未遂をしたという返事が来た」

「自殺未遂？」

「慕っていた俺だから話したと言っていた。やはり、良家の娘が自殺未遂というのは、世間的に良くない。理由、その他についてまでは先輩も話してくれなかった。しかし、どうやら彼を悩ませていたのは、その後のことらしい」

「後遺症でも残ったのか？」

「良い言い回しだな。その質問だと肯定になる。仮に君が不能という表現を用いてきたら、答えは否であった」

「つまり、五体に問題はないということか」

「そうだ。実に科学的にも医学的にも難しい状況にその妹は置かれているらしい」

大正特有とも云える表現で説明され、賀集は少し思案して、一つの見解を述べた。

「……記憶か？」

「肯定だ。それが実に、今の君に適している後遺症なんだ」

「どういうことだ？」

賀集は眉を寄せる。今度の彼の意図はどうにも掴めなかった。

「別人の記憶というべきか、医学的な表現で人格障害というべきかわからないが、当人は別の人間だと主張しているそうだ」

「ジキル博士とハイド氏の様だな」

「俺は医学的知見がない。故にそれ以上の説明はできないが、興味深いのは、その彼女が主張する人間だ。自分は未来の人間だと主張しているそうだ」

賀集は思わず立ち止まった。目を見開いて、呆然と立ち止った。

数歩先で振り向いた大正がニヤリと笑みを浮かべる。

「どうだい？ 君のインスピレーションに影響を与えそうな話だろう？」

岩倉邸は、大正の説明の通り、本郷と駒越の間、根津神社近くの小高い丘の上の住宅地にあった。一際広い敷地が岩倉家であり、中へ入ると手入れの行き届いた庭に囲まれたコンクリート製の西洋風の建築の邸宅が二人の目に飛び込んだ。真新しい造りであるが、近づくると柱など至る所に補修された痕があり、震災前に建てられたことが窺える。

「お約束していた大正です。こちらは友人の賀集と云います」

入口で対応した初老の執事に大正が挨拶をすると、彼は恭しく頭を下げ、承っております、と僅かに擦れた声で言い、二人を邸内へ促した。

玄関ホールから吹き抜けになつており、中央に架けられた階段を昇り、二階の床一面タイル張りの廊下を歩いていく。カラコロンという大正の下駄の音が廊下に響く。

大正は一応の礼儀のつもりで脱いだ学生帽を団扇代わりに扇ぎながら執事の後に続く。大正の隣に並んで歩く賀集は、ハンチングを深く被つたままにしている。

やがて、執事は突当りの扉の前で立ち止まった。後に続く二人も扉の前で立ち止まった。

「なな子お嬢様はこちらの部屋で療養なされております」

そして、彼は扉をノックし、ドアノブに手をかけた。そこで、一度動きを止め、再び二人に顔を向けると、声を落として言った。

「くれぐれも、お嬢様を刺激する様な言動はお控えください」

二人は頷いた。

それを確認すると、執事は、失礼しますと言いながら、扉を押し開いた。

その瞬間、風が吹きぬけた。

夏の暖かく湿った空気ではなく、涼しい乾いた空気が賀集の頬を撫ぜたのだ。

それは恐らく、丘を通過する地上の熱気を吸っていない空気が流れている為なのだろう。なんとも、爽やかな風であった。

「次は、何の先生？ 心理学？ それとも、精神医学？」

若い女性特有の澄んだ高音の音が、畳が優に十畳は敷ける室内に広がった。それは、まるで水面に広がる波紋の様に、部屋の隅々までに行き届く声であった。

声の主は、例の爽やかな風が入り込む窓から一米程離れた場所に置かれた洋式寝台の上に、上半身だけを起した状態で腰を下ろしていた。彼女は麻地の衣を肩に羽織っているが、体に身に纏っている

のは白色の襦袢一枚だけであり、素肌の色が僅かに透けている。

「！ 誰、この人達は！」

少女、岩倉なな子は視線を賀集達に向けると、彼らが自分と同世代であった事に気がつき、慌てて肩に羽織っていた衣を寄せて、前を隠す。

その時、賀集は初めて彼女の顔を確認した。彼女は、短く艶のある黒髪と大きな瞳が印象的な細い体躯の少女であった。

「はじめまして。手前は一高三年の大正。年号の大正、明治と書いて、おおまさはるじと申します」

まず大正が挨拶をした。続いて、賀集も挨拶をする。

「大正の友人で、賀集一喜と申します」

賀集が名乗ると、再び大正が得意の饒舌で一通りの挨拶を言おうとする。

「本日は、お兄様から貴女が療養中の身というお話を伺い、勝手ながらお見舞いに……」

「来るという口実で、自称未来人と言って、周囲から気違い扱いを受けている私を見に来たんでしょ？ 好奇心だけで」

彼女は冷笑を彼らに向けて言った。凶星を突かれた賀集は、何も言い返すことができなかった。口を開いたのは、やはり大正であった。

「実的確な状況分析ですね。確かに、俺達は上野動物園に連れてこられた珍獣を見に来た物見客と何も変わらない。……しかし、君は違うのではないですか？ それが、正しく本物の珍獣なのか、ただの紛い物なのか」

大正の言い回しに、彼女の表情が険しくなる。

「私が嘘をついているって言うの！」

「肯定です。第一に、時間移動をする事が現実として可能なのかという問題があります。第二に、世界……この場合は社会という認識が近いですが、判断する君は、岩倉なな子という現在、誕生からこの時点まで生存している人間として存在している。未来人なら、貴

女は生まれた時まで遡っていなければならぬ」

大正は淡々とした口調で、彼女の主張を切り捨てた。

「だったら、DNA鑑定でもして見なさいよ！」

彼女は声を少し荒げた調子で言った。しかし、彼女以外は怪訝な顔をしている。

直ぐに彼女は気がつき、眉間に指を当て、嘆息する。

「ああ……そういえば、DNAってまだ見つかってないのよね」

眉間に当てている右腕には布が巻かれており、その布は寝台の柵に結ばれていた。

「はあ。何でよりによって過去なのよ。……まだ見つけられてなかったり、作られてなかったりしたら、幾ら説明しても理解してもらえないじゃない」

「それは早計というものだ」

そこで口を開いたのは、大正であった。彼は彼女に近づきながら言う。

「名称などは、その概念を理解している者が認識を共有する為に使う存在にしか過ぎない。例えば、俺は先ほど君に大正明治と名乗った。これによって、君とそこにいる賀集の間で、大正明治という名前が俺を指すという認識が共有されたことになる。しかし、他人に俺という存在の認識が共有できないかといえば、答えは否だ。俺の人となり、経歴や能力、情報を与える事で、大正明治の名が俺を指す事を、俺と直接会った事のない者とも認識を共有する事ができるというわけだ」

「何が言いたいの？」

突然、持論を展開し出した大正に彼女は不快感を露骨に出して聞いた。彼は即答した。

「DNA鑑定とやらを、説明すればいい！」

「それは……えーっと……」

彼女は口を開いた状態で視線を巡らせたり、眉間に皺を寄せたり、指を宙でクルクル回したりしている。イメージは漠然と出来ている。

しかし、それを口で説明できない。そんな状態であるのは、賀集にもわかった。

しかし、大正は意地悪にも追い討ちをかける。

「どうした？ 説明ができないのか？ 認識できてもない言葉を使つて、何の意味がある？」

「……………」

大正の言葉に何も反論できず、彼女はただ唇を噛む事しかできない。

「今までどんな偉い先生が訪ねたかは知らない。だが、根本的なことを突き詰めようとしていた者はいなかったようだな」

「……………根本的なこと？」

彼女は大正を見上げた。彼は、ニヤリと笑い、言い放った。

「君が、岩倉なな子以外の何者でもないという事実。そして、それを証明する為に必要な疑問、哲学的な疑問とも云える。……………つまり、君は誰か？ それを、証明できるか？」

「私は……………」

彼女はすぐさま、彼に反論しようとした。しかし、後に続く言葉が出てこない。

彼は非常に意地の悪い質問をした。自分が誰か、などという事を、自分以外の者に証明する事など、殆ど不可能な事なのだ。

しかし、彼女は一度目を閉じて、ゆっくりと息を吸い、吐き出すと、目を開いた。

「……………証明なんて必要ないわ。だって、私は、大正時代の岩倉なな子じゃない。……………そうよ、私は、21世紀の中沢菜々よ！」

それを彼女がはっきりと言い切った瞬間、賀集は彼女と視線を合わせてしまった。それによって、彼は気がついてしまった。

彼女の言っている事は、嘘ではないと。

賀集一言は、京橋に家を構える、出版関係でそれなりの富を築いている家の子どもとして生まれた。しかし、育ちの大半は宇都宮にある母親の実家である。

彼には、既に両親はいない。彼の肉親は、宇都宮の祖父母と京橋の祖母だけである。父親は、三年前の関東大震災で発生した大火災に巻き込まれて死亡した。父親の弟も同じく震災で死亡している。

しかし、母親の死は、全くそれらとは違う理由であった。

話は彼の生後一年を迎えようとする時期に遡る。

当時、彼も母親も京橋の家で暮らしていた。まだ乳飲み子であった彼の頭に生えていた産毛が頭髮としての太さと長さを持ち、その一本一本に色がついてきた事が起因となる。

彼の髪色は、黒ではなく、茶色であったのだ。

勿論、彼の両親は愚か、その両親もまた、黒い髪であった。

父親の弟、つまり彼の叔父は母の不倫を疑った。それにけしかけられた祖母も、彼を不倫の子であると疑った。

始めは根の葉もないことだと言い、母の疑惑を否定していた父親も、次第に妻の不倫を疑い始めた。

彼女は必死に潔白を訴えた。しかし、既に京橋の家に彼女の味方となる者は、乳飲み子である賀集以外にはいなかった。

彼女は、故郷の宇都宮に帰り、両親に彼を預けた。事情を聞き、娘の潔白を信じた両親は、彼女に離縁を薦めた。毎夜の様に続いた交渉の末、彼女は遂に首を縦に振った。

彼女の答えに、彼らは安堵した。

しかし、それは帰郷後、彼女が両親についた始めての嘘であった。明るる朝、彼女は庭の松の枝に吊るした縄の輪に首をかけ、自殺した姿で見つかった。

後に、父方の祖母の祖父に当たる人物が、大陸の人間の血が入っ

ている明らかになった。しかし、それは納骨を済ました後の話であった。納骨は、祖父母と乳欲しさに泣く、彼の三人だけで行われていた。

長男の息子とわかった京橋の家は、離縁が成立していなかった事を理由に、彼を引き取るうとした。しかし、祖父母は断固として反対した。

結果として、妻を死に追いやった責任を感じていた父親の説得で、叔父と祖母は諦め、以降十数年間、交流を絶っていた。

しかし、三年前の震災での訃報が届き、事態は変わった。老婦人一人が生き残り、孤独となったのだ。

同時に、青年となった賀集の事情も変わっていた。彼は、作家の夢を持ち、上京したいと考えていた。

結果、彼は祖母の世話をする代わりに京橋の家へ住む事になった。つまり、書生と同じ待遇で、後に相続することとなる家に住んでいるのである。

これまでの話は、賀集が宇都宮の祖父母から後に聞いた話と、京橋で生活することになってから祖母から聞いた話を合わせた、客観的な事実である。

当時、乳飲み子であった彼が記憶に残っていないのは仕方のないことでもある。

しかし、彼には唯一、主観的な記憶が残っている。

それは、母親が京橋の家で必死に潔白を訴えた時の一瞬。母の胸に抱きしめられた彼が、潔白を訴える母の目を見上げた瞬間の記憶。それが、生来彼の持つ才能の一つであったのか、この時の経験が起因となっていたのか、それは彼自身もわからない。

しかし、現在の賀集には、目を合わせた者が嘘を言っているのか、否かがわかるのだ。

そして、自分を中沢菜々と名乗った岩倉なな子の目は、記憶に残る母親と同じ、嘘のついていない目であった。

翌日、岩倉家に賀集の姿があつた。大正はいない。彼一人だつた。「また来たの?」

彼女は昨日と同様、寝台から上半身だけを起し、部屋に入った賀集を一瞥すると直ぐに視線を窓の外へ移し、呟いた。

窓から見える空は、昨日同様に晴天とまでは言えない天気であつた。

「明日は雨が降るかもしれない」

賀集が呟いた。彼女はポツリと返した。

「そう。……天気予報で言つてたの?」

「ああ」

予想外にも、素直な返しに少し驚きつつも、彼は頷いた。

「朝のラジオで言つていた。まあ、当たることと外れることが殆ど同じく位だけだな」

「ふーん……。そんなに外れるんだあ……」

「どんなに優れた観測者でも、見ている空は我々と同じだから、仕方がない」

「そりゃそうか……」

「なら、君の時代はどうやって天気予報をしていたんだい?」

「簡単よ、宇宙から見ればいいのよ」

「宇宙?」

「人工衛星よ。雲の様子を宇宙から見る機械よ。地上から見て予想するよりも簡単でしょ?」

彼女は言い終わつて初めて、賀集が自分の話を肯定し、聞いている事に気がついた。

「私の言っていること、信じてくれるの?」

「嘘をついていないんだから、信じるしかないだろう。君は21世紀の中沢菜々だ。それは嘘ではない」

「……本当に、信じてくれるの?」

彼女は不安と期待、そして疑念をその大きな瞳に懐き、賀集の目を見つめる。

彼はゆっくりと頷いた。

「そんな……真剣な目で、私の話を聞いてくれたの……あなたが……初めてだよ」

彼女は言葉を発する度に、瞳を一層に潤ませ、仕舞いには涙を流していた。

「なんで泣いているんだよ」

「だって……嬉しいんだもの！」

涙腺が狂ってしまったかの様に、滞る事を知らぬ涙で顔面を崩した彼女は言った。

それを聞いて、賀集は思わず微笑んだ。

「嬉しいのだったら、笑えよ。泣くべきじゃない」

彼の言葉に、彼女は一度顔を伏せ、勢い良く顔を上げた。

「……………うん！」

その笑顔はとても綺麗であった。

「つまり、賀集さんは小説家で、そのネタ探しで私に会いにきたってことなんだ」

落ち着いた彼女は、例の執事が部屋に届けてきた温かい西洋紅茶を一口飲むと、賀集の話した過程についての感想を言った。

「ああ。しかし、事実とは考え難い話だったから、あまり気乗りはしなかった。アイデアに行き詰っていたから、その気分転換に大正と出歩きながら議論を交わせればそれでよかったと思っていたのが、本心だな」

寝台の脇に置いた椅子に座る賀集も紅茶を口に流すと、答えた。
白い陶器のティーカップに満たされた澄んだ紅色を帯びた液体から放たれる香りが、鼻、口、そして再び鼻を抜けた。

「ま、冷やかしに来たお友達の大正って人よりも印象はよかったけどね」

「そう言うな。彼は昔からああいう物の言い方しかできない者なんだ。それに、彼も君の言っていた話、満更でもないと思っている。」

信じているかは兎も角、真剣に話を聞いていた」

「アレで？」

彼女は眉間に皺を寄せ、目を瞬かせて聞いた。賀集は苦笑混じりに頷いた。

そして、もう一口、紅茶を啜ると、賀集は話を切り出した。

「それで、本題なのだが、こうして君と出会えたのも縁だ。自分は是非とも未来についての小説を書きたい。協力して頂けないだろうか？」

姿勢を正した賀集は、改まった口調で彼女に提言した。ある程度の展開を予想していた彼女はわざとらしく腕を組んで考える素振りをする。

「うーん、どうしようかなあ〜」

「頼む！」

賀集は頭を、椅子に座る自分の膝よりも下になるのではないかと思うほどにまで下げて、懇願した。

彼女は思わず噴出した。

「ちょっと、それじゃ真剣さが伝わらないわよ？」

「あ……、失礼」

「全く……。いいわ！ 但し、条件があるわ」

「条件？」

「私もその小説の執筆に協力させて。そして、小説は私と一緒に書く。彼此一ヶ月近く、ここに閉じ込められて退屈なの。当たり前だった話が、この時代じゃ当たり前前に話すとキチガイ扱いだもの。いいでしょ？」

彼女は目を輝かせて、賀集の返事を待った。

「わかった。その条件を呑もう」

賀集は頷いた。

「やったー！ じゃあ、賀集さん、よろしくね！」

思わずガッツポーズをした彼女は、満面の笑みを浮かべて右手を差し出した。賀集はその手を取り、握手した。交渉成立だ。

「こちらこそ。ええーつと、中沢さん？」

「菜々で良いわ。中沢っていうと、周りの人から変な目で見られるでしょ？ 菜々だったら、なな子の呼び名に聞こえるから」

「わかった。宜しく、菜々君」

執筆は翌日から開始された。

賀集は、早めの昼食を取り、すっかり見慣れた根津神社を通り、正午に岩倉家を訪ねた。最早、無駄な応対はなく、執事は淡白に賀集を菜々の部屋へ通した。

「どうしたの、その荷物？」

昼食の冷しうどんを啜っていた菜々は、賀集が肩に下げている大きな書類鞆に気がつき、挨拶も抜きに指摘した。

「執筆というのはただ紙と筆があればいいというものではない。資料をまとめ、構成を組む必要があるんだ。昨日、ここの帰りに帝大の図書館に行ってきた」

そう言うと、寝台に腰を下ろしている彼女がうどんを食べるのに利用していた足に車の付いた移動式の机の上に、鞆から出した本を次々に積み上げていく。

「何、コレ？」

「これは少年向けの雑誌、少年倶楽部。これは譚海。これは赤い鳥だ」

どれも表紙に片手を振り上げた夢を持った子どもの絵が描かれた雑誌を積み重ねる。

「帝大つて、こんなものもあるの？」

「いや、これは私の蔵書だ。帝大は、資料の情報収集をしていただけで、貸し出し時間が過ぎてしまった」

「……………」

菜々は何も言わずに、器に残ったうどんを啜った。汁の中に浮かぶ、かち割りされた氷が暑さを癒す。

「自分は、これら雑誌に掲載されている様な子供に夢を与える小説

を書きたい訳だ。それには、やはり未来を舞台にした空想小説が最適だと思う。まず君のいた、21世紀は具体的にいつ頃なのかい？」
菜々が冷たい汁まで飲み干すと、賀集は机に紙と万年筆を用意していた。

「2010年7月よ」

「なんだ、百年も先ではないのか。いや、その方が未来を想像しやすい」

彼は紙にメモを取った。そして、質問を続ける。

「よし、続ける。住まいはどこだい？」

「江戸川区」

「……どこだい？」

賀集は顔を上げた。

「え、まだ東京都江戸川区ってないの？」

驚く菜々に頷く賀集。

「今の東京は、東京府。ここは東京府東京市本郷区に当たる。下の地名は何？」

「一之江」

「ああ、今は東京府南葛西郡瑞江村だ」

「郡？ 村？ ……都心じゃないと思ってたけど、村だったんだ…」

気持ちが盛り下がりが苦笑いを浮かべて菜々は呟いた。

「この数十年で東京がそれだけ発展するという事だろ？ 喜ばしいと思うがな」

「そう考えることにするわ。……待って、地下鉄ってあるの？」

「地下鉄は、現在工事中だ。上野から浅草を繋げる予定らしい」

「あーメトロの銀座線か。銀座線が最初の地下鉄だったんだ、知らなかった」

「東京地下鉄道はそう呼ばれるんだな」

「という事は、一之江駅を通る都営新宿線が出来るのはまだまだ先ね」

「それはわからない。来年かも知れないし十年後かも知れない。自分は、地下鉄道の事しか知らないからな。……さて、続けよう。君の年齢は、岩倉なな子と同じ17歳かい？」

「そうよ。都立高校の三年生。って言っても、確か今って違つのよね、学年の取り方」

「現在の学年は、尋常小の六年、中学校の五年、高等学校の三年、大学の三年になっている。自分は中学卒だが、同級生の大正は現在第一高等学校の三年生だ。彼は来年帝大に上がる予定だ」

「そういえば、一高って名乗ってたわね。……という事は、18歳ね」

「ああ。そつちは？」

「小学校六年、中学三年、高校三年、大学は大抵が四年よ。でも、高卒や大卒で就職する人が多いわね」

「成程な」

賀集は頷きながら、紙にメモを取る。

そこへノックの音が聞こえ、菜々が応じると、執事が食器を下げて来た。ついでに賀集はトイレを借りたいと頼んだ。

「しかし、本当に大きな家だ。古いだけの京橋の家とはまるで違う」
用を足した賀集は、装飾の施された壁などを眺めて、一人感想を呟きながら、廊下を歩いていた。

「貴方がなな子を毎日訪ねている作家ね」

唐突に背後から声をかけられた賀集は驚いて体を跳ねらせ、振り向いた。

彼の後ろには、長い黒髪を後ろに束ねた女性が立っていた。顔は菜々そっくりであったが、その雰囲気は大人びている。一目で岩倉なな子の姉であると思いが付いた。

「なな子さんのお姉さんですか？」

「そうよ」

彼女は頷いた。今後小説執筆の為に通い詰めることになる事を決

めていた賀集は、可能な限り愛想の良い表情をして挨拶をした。

「そうですか。はじめまして、賀集一喜と申します」

「ゆきよ。よろしく」

岩倉ゆきは、会釈程度に首を下げた。そして、彼の横を通り過ぎた。その時、彼女は小さく、しかし彼の耳に届く声で囁いた。

「人の不幸を喰いものにして、最低ね」

咄嗟に、弁解を言おうと彼は振り返ったが、彼女は近くの部屋に入ってしまった後であった。わざわざ部屋に入ってまで弁解を言うべきではないと判断し、気持ちのどこかにしこりを残しつつも、賀集は菜々の部屋に戻った。

「それで、どんな小説を書こうと思っているの？ 21世紀の事を書くって言うても、色々あるでしょう？」

部屋に戻ると、少年少女譚海を流し読みしていた菜々が聞いた。

「それについてはまだ構想中だ。仮にその頃、戦争があれば、それを題材にした冒険小説を書こうとも思っている」

「残念ながら、日本は戦争してません」

パサリと音を立てて譚海を閉じて、菜々は言った。

「ならば、平和の中にあるちよつとした冒険を書きたい。旅行記としてもいいな」

「それ、これの影響？」

菜々は今し方読んでいた譚海を見せる。六年前のバックナンバーで、連載小説の中に鹿島鳴秋の小人島奇譚があった。

「これって、ガリバー旅行記でしょ？ 私も小さい時に読んだわ」

「そうだ。スウィフトの翻訳小説だな。自分が始めて買って読んだ雑誌だ。この世界に足を踏み出そうと考えるようになった作品だ」

賀集は懐古する眼差しで譚海を手にとって言った。

「ふーん。……それで、旅行記ならどういふのにするの？ この時代の人が未来に行くとか？」

「いいや。それも面白そうだが、それでは未来の世界を軸においた

物語ではなく、時間移動を軸に置いた物語になってしまふ。登場人物はその時代の人物にする。……菜々、未来では移動手段の発展が予想される。鉄道はその網を広げ、高速鉄道なる物も完成しているだろう」

「うん。新幹線がそれね。東京と大阪が二時間半だったかな？」

「それはすごい！ 高速鉄道ではなく、夢の超特急だな！」

賀集は興奮し、鼻息を荒くして紙にメモを取り、更に質問を続ける。

「それから、海路と空路だ」

「船？ ……わからないわ。水上バスとかは昔乗ったことがあるけど、移動手段というよりも観光の一つみたいな感じだったし」

「という事は、空路の発展が考えられるな」

「確かに、日本中至る所に空港作ってるわね」

「つまり、多数の客を乗せる大型の飛行機が完成しているという事か？」

「うん。何人くらい乗れるのかな？ 百人くらいは乗れる飛行機が飛んでるわね。あれ、数百人かしら？」

「成程。それほどの力だと、プロペラ推進ではなく、ジェットエンジン推進の飛行機が開発されたということかな？」

「あー……、そういえば、ジャンボジェット機って飛行機の事を言うわね」

「それはアメリカ本土へも行けるのか？」

「友達が去年シアトルに家族旅行で行ってたわね。何時間だったかな？ 10時間以上はかかったと思うわ」

「それは、距離の関係で仕方ない事かもしれないな。いや、一日とかからずにアメリカ本土へ行けるのはもの凄いことだ！」

目を輝かせて、賀集はメモを取り、宙を見上げる。当然、見えるのは天井の筈だが、今の彼には、大空を翔る飛行機の姿が見えていた。

「それで、どうい話にするの？」

そんな空想に浸る賀集を呆れた眼差しで見ながら、菜々は聞いた。「そうだな。祖母の使いで、少年はアメリカへ出かけるというのはどうだろうか？」

思わず菜々は肩を崩した。

「ないない、絶対はない！」

菜々は高い声を上げて否定した。

「なら、中国か？ ソビエトか？」

顔を上げた賀集は、ずれた眼鏡を指で上げながら聞いた。

「そうじゃなくて、おばあちゃんのお使いで海外へ一人で行く子どもなんていないって言ってるの！」

菜々は両手を前につき、主張を訴えた。賀集は即座に反論する。

「だが、飛行機は沢山の人を乗せられる様になったのだろうか？ 自分も十の時に、祖母の使いで電車に乗って、宇都宮からこちらまで行ったことがあるぞ」

「距離が違うでしょ、距離が！」

菜々は嘆息した。しかし、彼は不満気な表情をする。

「宇都宮から上野まで何時間もかかるんだ。……それに、あまりに近いところでは旅行記に成るまい。精々異国は行きたい」

「いいけど、私は海外旅行に行ったことないわよ」

「そ………そうなのか」

菜々の一言で賀集は落胆した。

「別に海外じゃなくてもいいじゃない。工夫一つでどうにでも出来るのが小説でしょ？ 腕を見せどころよ。それに、一応私は都民よ！ 東京の事だったららせて！」

賀集は顔を上げた。なんとも情けない笑顔を菜々に向けて頷いた。しかし、この日は妙案が浮かぶ事なく、賀集は帰宅の徒についた。

「つまり、彼女が未来人だということになる訳だ」

五日後、この日も賀集は上野へ向う山手線に乗っていた。この五日間、賀集も菜々も小説のアイディアは浮かぶものの、作品としての像が纏まらず没になることを繰り返していた。

電車内の長椅子に腰掛けながら、新たなアイディアを考えていたはずの賀集であったが、気がつくとも最初に岩倉家を訪ねた後に菜々が嘘をついていないと大正に伝えた後の彼の発言を思い出していた。大正が先の言葉を発したのは、帝大に向って本郷通りを歩いている途中であった。近くの学校でファールボールが打ち上げられる音と近所の住人の罵声が聞こえ、賀集が我輩は猫である的一幕を思い出している時であった。

「しかし、それを仮定すると大変な問題が生まれる」

「彼女は何故時間移動が出来たか？」

「そうだ。当然ながら、時間移動は絵空事だ」

大正は真つ直ぐ前を見つめて断言した。

「珍しいな。大正が仮定すら否定するなんて」

「否とは言っていない。しかし、時間は不可逆的な存在、つまり逆行する事のない存在だ。相対性理論を展開したアインシュタインは、光には粒子の性質もあると考え、二年前にフランスのブロイ公爵が物質波という、電子のような粒子にも波としての性質があるとの概念を提唱した。更に、昨年ドイツのハイゼンベルクが行列力学を、今年にはオウストリアのシュレデンガアが波動力学を展開した」

「それが何を意味するんだ？」

「物理学の基本は、運動を計算する事にある。運動に関する方程式に登場する時間の値、 t は、当然ながら本来は正の値だ。しかし、負の値を当ててもその方程式には変化がない。これを時間対称と言つて、何十年も前から世界中で議論がされている。議論の本質が何

「なっているかはわかるだろう？」

「先ほど君が言った、時間が不可逆的な存在ということだろ？」

「肯定だ。この逆戻りすることのできない時間の方向性を放たれた矢に見立て、時間の矢と呼んでいる。この謎を解くことが物理学の課題の一つだ。同時に、この先に存在するのが、過去と未来の関係だ。乱暴な言い方をすれば、方向性が対称になっているだけで過去も未来も同じ値だ。しかし、未来には、歴史という過去の積み重ねが存在する。この手の話は俺よりも賀集の方が詳しいだろう？」

「時間を遡ると事実が変わってしまう。この問題だな？ 多くの空想作家がこの難問に苦しんでいるよ」

「それを都合よく解釈できるのが、先の粒子と波の性質を伴う存在だ。一つは、人という物質も同じ様に波としての性質を持つ、または与えられるかも知れないという事だ。しかし、それ以上に都合のいい話は、粒子であることと波であることの確率だ。粒子を物質的な意味で存在すると仮定すると、波では存在しないと言い換えられる。先の行列力学と波動力学はその確率についての話をしているんだ。ある瞬間に存在するか、否か」

大正は懐から二銭銅貨を一枚、取り出した。

「もつとわかりやすい言い方をしよう。この銅貨が件の粒子としよう。この段階では、賀集の目に見える。だから、今俺の右手に存在しているという確率は十割だ。しかし……」

大正は二銭銅貨を持つ右手と左手を重ね合わせ、それを離すと握った状態で賀集の前に突き出した。この状態では賀集にはどちらの手に二銭銅貨が入っているかわからない。

「さて、この時に銅貨は左右どちらの手中に入っているか、君にはわからない。この状態を、言い換えると、右手と左手それぞれに銅貨が存在する可能性は同じだけある。つまり、右手に存在する状態と左手に存在する状態が共存するとも言える。これは手を開くまでわからない。つまり、手を開いて、確定するまでは右手に存在し、同時に存在しない、曖昧な状態の存在で存在していると言える」

「右手だろっ?」

賀集がジトツとした目で大正の目を見て聞いた。

「……」

「答える、右手だろ?」

「否」

「嘘だ。右手に存在する」

賀集が指摘した。大正は溜息をついて右手を開いた。その掌には二銭銅貨があった。

「お前は神にも挑めるな。……これは俺という存在があったから、君に確定する事ができたが、自然界ではそうじゃない。この曖昧な状態を成立させる考え方が、平行世界の肯定だ。左手に存在していた世界も存在していたという考え方だ。これで、因果律を否定できずに全否定されていた時間の逆行を肯定できる要素になる」

「つまり……どうということだ?」

「今のこの時間というのは、無数にある存在するか否かの選択肢を進んだ一つの結論にすぎないという事だ。過去へ遡った未来とは別の未来が遡った過去から経過する時間の先には存在するとすれば、時間の持つ因果律は意味を成さない」

「つまり、方法は兎も角、時間移動そのもので生じる矛盾は、無視できるのか?」

「乱暴な空想だ。しかし、方法を問う議論よりも先に出てくる、時間の不可逆性に関する問題を肯定できるものにしなければ、方法論もなにもない」

「そうだな。……しかし、もっと単純な考え方もあるな」
「え?」

賀集が立ち止まり、ボソリと言った。数歩先に出た大正が振り返った。

「時間の不可逆性については置いておいて、その因果律に関してはもっと簡単な結論がある。起点である未来で、過去は確定しているという事だ」

「つまり、過去に時間移動するという出来事が既に成立した未来と
いうことか？」

頷く賀集。

「そうだ。それなら、全く問題ない。中沢菜々という未来人が存在
するこの時間の先に、時間移動する中沢菜々が存在するという事だ。
つまり、彼女はまさに運命が確定している存在ということか。……
いや、この俺も君も、世界そのものが既に運命が確定しているとい
う事か。……その考え、その意味がわかっているんだらうな？」

「当然だ。彼女の語る未来は、全てが確定している未来だ」

「それでも、お前は彼女の元へ行こうと考えているんだらう？」

大正に聞かれ、賀集は頷いた。

「これは運命だ。自分は空想小説を、いや、彼女から聞いた未来の
世界を元にした小説を書く」

「わかっているだらう？ 君は人の嘘を見抜ける。君が接触する事
で、彼女が語る事が嘘であるという可能性すらも否定してしまう。
人が信じる時間の曖昧さの一切を否定し、確定した未来を知ること
になる。……俺は行かない。俺にはやろうとしている事がある。

先ほど話した内容には、まだ議論中のもも多い。未来の事実を聞
かなければ、俺にはまだ未来の事象が不確定であるとも解釈できる。
だから、俺は行かない。お前も、俺が聞くまで、彼女から聞いた未
来の事は一切を語るな！ わかつたな！」

大正は強い口調で言った。それには、自分の死を宣告しない様に
担当医へ頼み込む末期患者の如く、鬼気迫るものがあつた。

彼はそのまま弥生にある一高の寮へと消えて行った。

「あ、着いた」

山手線が上野駅に到着したことに気がついた賀集は、一気に現実
に引き戻された。

「考えたわよ！」

例の如く執事に促されて菜々の部屋に賀集が入ると、彼女は開口

一番に言った。

「なんだ、藪から棒に」

「だ、か、ら！ 小説のアイデアを考えたのよ！ 今度こそ、いけるわ！」

「本当か？」

「ええ！」

賀集が聞くと、菜々は胸を張って頷いた。

「二つ考えたわ。ささ、メモして！」

「ああ」

目を輝かせる菜々に促されて、賀集は机に紙と万年筆を置いた。

菜々は自信満々に語りだした。

「一つは居なくなつたお母さんを探す兄弟の話。親子愛って泣けると思わない？ この情報収集とか、探しているシーンとかで未来っぷりをアピールするのよ！」

「未来っぷり？」

「未来の世界らしさよ。どう？」

菜々は身を乗り出して、賀集の反応を見た。

「うーん。悪くはないね。ありきたりだけど、その分空想未来という特異性が目立つ。……もう一つは？」

「もう一つは……、ちよつと子どもっぽい内容なんだけどね。主人公は親友同士の二人。そして、一人には兄がいるの。しかし、彼はなんらかの犯罪に加担しようとしていて、行方を晦ませている。それを気付いた弟は阻止しようとする。そして、彼の親友は、自分の大切な友人の大切な存在を守る為に、共に立ち上がるっていう、冒険小説なのかな？ さっきの話の後に派生で思いついた話なの。……ちよつと、王道だし、子ども向けすぎる内容よね？」

「いや、いいよ。実にいい！ 母を探す内容は、どうしても暗い印象を与えてしまう。しかし、兄という存在なら、子供にとつて守ってくれる存在である以上に、憧れの対象だ。その憧れが崩壊する事態に、彼ら自身が立ち向かう。自分はその展開が気に入った！ そ

れで行こう!」

「本当に?」

「ああ。君は作家の才能があるのかもしれない! いや、今からワクワクしてしまうよ!」

「へえ……賀集さん、そういうのがツボだったんだ。……あ、納得できるわね」

普段の言動から意外性を感じた菜々であったが、直ぐに昨日の少年雑誌のことを思い出し、納得した。これが彼の本質なのだろう。

「よし、では早速登場人物を決めよう。主人公二人と兄の三人でいいだろう。この手の作品は主軸を決めて、その他の登場人物は脇役に留めた方が短い作品にしても、内容を深く突き詰める事が出来る」

「名前は?」

「決めても決めなくてもいい。ただ、登場人物を存在している人間のように描くには、やはり人物設定を詳細に決めた方がいいだろうな」

「なら、ぴったりの名前があるわ」

「なんだ?」

賀集が聞くと、菜々は紙を受け取り、二つの名前を書いた。

「和昭と成平。……妙に平凡な名前だな」

「これがいいのよ。きつと、数十年後にこの小説が未来を描いた小説だと気付かせるひとつのヒントになるわ」

「まあ、この程度なら構わないな。それで、兄の名前は?」

「うーん、考えてなかった」

「平和や明るいものを想像する名前がいいな。和昭の兄として、名前を一文字使うのがいい。和……昭……。よし、光昭はどうだ?」

「うん。いいじゃないの?」

菜々は特に思案する事なく返事をした。ちなみに、光昭は平成の他に上がった年号の候補の一つと噂されているものの一つであるが、当人は知るはずも無い。

「よし、これで名前はいい。次は彼らの設定だ。年齢、容姿、環境

は最低限決めておきたいところだ」

「成程ね」

「読者層である少年が読みやすく、自分としても書きやすい年齢として、15歳くらいがいい。思考もある程度、確りしているし、責任感も出てくる。自立も出来る年齢だ。この年齢なら、成長による変化も顕著に描ける」

「という事は、中三ね。高校受験とかの不安も抱えつつ、友達との思いでも一杯作りたい……………懐かしいなあ」

菜々は遠い目をして、言った。

「学齢や教育が変わっていても、その年齢毎の思い出は同じなんだな」

賀集が微笑んで言った。

「そうだね。……………それで、お兄さんは？」

「18がいいな。これは、心情などが難しいと予想される人物を、自分の年齢と同じにすることで、想像をしやすくなる。次は彼らの環境だ」

「さつきも言ったけど、普通は中学三年生で、高校受験を控えているわ」

「それもあるが、この場合の環境は、どういう場所に住んでいるか、どういう家庭にいるかなどに該当する」

「ああ、成程ね。やっぱり都内の方が書きやすいんじゃない？」

「瑞江村か？」

「いやあー、まだショックなんだから、言わないでよお」

菜々は手で耳を押さえる仕草をして、拒絶を表す。賀集には、その仕草が妙に滑稽に見えた。

「村人」

「ふえー」

「村民」

「んぎゃあ」

「東京市民外、東京府民」

「……あ、それは実感がなから大した事ないわ。……って、楽しんでるでしょ?」

「ああ」

賀集は、ジトツとした眼差しで睨む菜々に、平然と頷いた。

「いつか仕返ししてやるから、覚えておきなさいよ。……で、本当のところ、場所はどこの?」

「この近辺が一番妥当だと思う。必要に応じて現地取材にも行けるから」

「なるほどね。……でも、私は取材に行けないかも」

「何故?」

賀集が聞くと、菜々は黙って腕を上げて、腕に結ばれていた白い布を見せる。

「気になっていたけれど、それはなんだい?」

賀集の質問に、菜々は授業中に教科書の問題を読み上げる教師の様な口調で言った。

「目が覚めました。そこは見知らぬ部屋で、知らない人達が自分を違う名前で呼び、全てが過去の世界でした。これを信じられますか?」

首を振る賀集。菜々は続ける。

「私は混乱しました。とりあえず、周りの人は私の言動に不審を抱き、この部屋から出してくれません。さて、状況を把握したい私はどうしたでしょうか?」

「……脱出を図ったのか。なるほど、この部屋なら窓を使うな。それが投身自殺を図っていたと勘違いされた訳か」

「正解! お陰で、この布の結び目、どうやってるんだか片手じゃ全く解けないのよ。つまり、私は軟禁状態という訳よ」

菜々は肩をすくめてお手上げだという仕草をした。そして、話題を再び小説に戻す。

「それで、どうするの? 後は実際に書くの?」

「そうだな。自分の書き方は、大まかな構想が出来た段階で書き始

めてしまう」

「意外と雑な作り方するのね」

「いいや、それくらいの方が物語は元気になるんだ」

「元気？」

「自分は、小説が生き物であると考えている。どれほど詳細に決めていても、書き始めてしまえばその通りには行かない。必ず、予測の出来ない展開や発想が綴られてしまうものだ。だから、自分はその作品を書いているが、創造主だとは考えていない。作家とは、縦横無尽に展開する物語を望む方向へ指揮し、それを文字に起こしているだけの存在だと考えている」

「指揮者ってこと？」

「そうだ。吹奏楽団や鼓笛隊、それらの奏でる演奏は一つの曲に見えるが、作曲家の意図した楽譜という道筋を頼りに、個々が出す音を指揮者によって導いていることで、一つの曲として聞く人を魅了する。作家の役目は、その作曲家兼指揮者と同じだ」

「へえー、じゃあ早速奏でてみてよ。私達の空想未来小説を！」

「そうだな。……では、聞こう。君の時代のこの近辺の街は、建物はどのようになってる？ エスカレーターやエレベーターは一般的になったのかい？」

賀集が質問を始めた。既に展開は頭にあり、実際に描写する上で必要な情報を仕入れようとしていると菜々は感づいた。

「あまりこの辺に来たことはないけど、確か上野駅は東京駅程じゃないけど、大きい駅だったわ。エスカレーターも階段があるところにはほとんど全てに併設されていたわよ。それから、お店屋さんも一杯入っていたわ。本屋さんに、喫茶店、そうそう物凄いラーメンに集中して食べられるお店もあった」

「なんだそれは？」

「個室みたいな感じで一人一人別々にラーメンを食べるお店なのよ。女の子一人でも食べやすいけど、友達と一緒に行ったときだったから微妙だったわ」

「……微妙？」

「ああ、あまりよくなかったって意味の流行り言葉よ」

「微妙ね。そうだ、他に流行言葉はあるかい？」

「うん。……マジとかもあるわ。本当という意味で使うわよ。本当に大変だった！ をマジで大変だった！ とか、本当に？ をマジ？ って使ったりね」

「ああ……あのマジか」

「え！ 知ってるの？」

「君の時代ほど広義で頻繁ではないが、古語表現の中にマジはある。歌舞伎か落語の台詞であつたはずだ」

「そうだったんだ……。流石は作家ね」

「まあ、それはそうで。これはマジで使えそうだ。」
賀集はニヤリと笑みを浮かべて言った。

「……兄貴！」

カタカタと音を鳴らし上昇する階段状の昇降機、エスカレエタアでホームへと向う最中、成平の前に立っていた自分と同じ夏期用学生服姿の五分刈りの青年が突然振り向いて叫んだ。彼の名は、和昭成平の幼馴染で親友だ。

直ぐに成平は自分に向かって言ったのではなく、隣接した下降エスカレエタアにいる人物に向かって彼が声を上げたのだと分かった。

しかし、ここは国鉄上野駅の山手線ホーム。利用者は雑踏となり、彼の声もかき消され、彼が見つけた人物もまた姿を見失った。

「兄貴って、光昭さんのことかい？」

成平は和昭に聞いた。彼は即座に頷いた。光昭は、二人よりも一つ年上の齡十八の帝大生である。頭脳明晰というだけではなく、さらさらとした綺麗な髪を持ち、その右の前髪を長く下ろし、そこから覗く目尻に向かって下がる瞳は、ほぼ同じ要素を持つ筈の和昭とは全く対照的な美少年でもある。

情に篤い熱血漢で通っている和昭が最も慕っている人物であるの

は、至極当然であり、それは大学受験を控えている高校生の成平にとっても憧れの人物であった。

しかし、それも半年前までの話である。

「……いや、気のせいだったのかもしれない」

和昭はエスカレエタアを昇り終え、下降エスカレエタアの先を振り返って見つめ、静かに言った。成平は何も言葉をかけることが出来なかった。この場合の想定をしたことはなかった。

半年前、光昭は一通の書置きを残し、帝大に退学届けを出して行方をくらました。それは、あまりにも突然の出来事であった。

「兄貴、何をしようとしているんだ？ ……マジに」

カタカタと音を立てて下に板を下ろすエスカレエタアを見つめて呟いた和昭の声は、周りの雑踏にかき消された。

肆

「ちよつと強引過ぎない？」

原稿用紙から顔を上げた菜々が言った。

「それは承知の上だ。しかし、意識的に追加した台詞とはこうなる運命なんだ」

賀集は彼女の手から原稿用紙を奪うと、それを鞆の中で折れてしまわぬように丁寧に厚紙に挟んだ。

「それって、賀集さんの实力的話じゃないの？」

菜々はジトツとした目を向けて言った。賀集は出されたお茶を飲んで誤魔化する。

「それで、どうやって兄の事を見つけるの？」

「そこが問題なんだ。新聞の写真というのも案ではあるが、面白くない。何か、新聞様な存在が未来にないか？」

「新聞がないわけじゃないけど……。そういう存在だと、テレビかな？」

「テレビ？」

「うん」

「それは、何だい？」

「そうねエ……。テレビって言うのは、ラジオは音だけじゃない？それが、映像も付いて見れるものっていうのかな？」

「そうか、映像を音と一緒に放送するのか！ 活動写真に音声が付いたものと同じものだな」

一人納得した様子でメモを書き込む賀集に対して、今度は菜々が理解できない。

「活動写真って、何？」

「え？ 未来には活動写真がないのか？」

「少なくとも、私は聞き覚えがないわ」

「活動写真というのは、たくさん連続した写真を映写装置で大衆

に見せて、動いている様に見えるものだ。そして、演奏家が背景音を、弁士が解説である活弁を奮うんだ」

「それって、無声映画じゃないの？」

「無声映画か。やはり未来での活動写真の呼び方は映画になるのか」「そうよ。写真って言うから何だか分からなかったわ。……そうね。映画みたいなものよ。それが、ラジオみたいにならなかつたの。もちろん、録画したものを放送するほうが多いけどね」

「なるほど。確かに、フィルムに撮影する代わりにラジオと同じ様に放送する技術さえあれば、実現することだ。とても想像しやすいものだ」

「でしょ？ テレビのニュースに写りこんでいたとか、結構ありそうだけど、一番手堅い展開だと思うわ」

「そうだな。……よし、それでいこう！」

賀集は力強く頷き、メモをまとめていき、直ぐに原稿用紙に物語を書き始めた。

その夜、成平が居間で趣味の機械弄りをしながら寛いでいると、仕事から帰宅した父親がスパイカアの付いた箱を棚からちやぶ台の上を下ろした。箱に付いている電源を入れると、居間の壁に活動写真動同様に、動く像が映し出された。

「こんばんは。今日の出来事をお伝えします。まずは、昨晚発生した最新型飛行潜水艦龍凰が盗まれた事件の続報を……」

映写している箱のスパイカアから、映像に合わせて声が聞こえてきた。この箱は、テレビというもので、ラジオに映像が加わったものである。故に、今映し出されている映像は、現在放送局で撮られているものが流されているのである。勿論、事前に撮られた映像を放送することもできる。

「……との見解を示し、未だ犯人の正体や目的については明らかになって降りません。また新しい事実がわかり次第、追ってお伝えします。」

続いて本日、上野恩賜公園で催された祭典の様子です』

男性の放送員の言葉に合わせて、映し出されている像が変わり、昼間成平達を通った上野公園の風景になった。

「そういえば、なにかやってた」

「なんでえ、好奇心のないやつだな。上手くすりゃ、テレビに映ったのよ」

壁に映し出された映像を見て、成平が呟くと、父親が言った。だが、彼の発言には一つ間違いがある。成平の好奇心は他者に抜きんでている。現に今も丸眼鏡をずり下ろして、手元の携帯式小型ラジオを改造している。遠視なのだ。

しかしながら、彼の好奇心の対象は、先刻父親が言ったものとは違うのも事実である。成平は姿勢を変えずに、眼鏡の上から視線だけを向けてテレビの映像を見た。

なるほど、撮影場所は露天が並ぶ通りとそこを行きかう人がある程度見える高さから撮影したものらしい。祭りに立ち寄れば映りこんでいる可能性は大いにあった。

とはいえ、成平は直ぐにその関心を撮影機材の性能に向けていた。初期の撮影機材に比べ、フィルムのコマの一つ一つの像がとても鮮明であり、コマ数も増え、非常に滑らかである。成平は授業で見た昔の活動写真の映像を思い出し、その技術の進歩に改めて驚かされていた。が、本当に驚くのは、その鮮明な像に映っていた人物の姿に気がついた時であった。

「！ 光昭さん？」

一瞬であったので、見間違いの可能性もあった。しかし、昼の上野駅での出来事もあり、成平は確信に近い念で、一瞬だけ人ごみの中に見えた見覚えのある人物を、その当人であると思った。

「……………」

「どうした？」

書きあがった原稿を読んだ菜々は何も言えなかった。一方、彼女

の目の前にいる当人は全く自分の間違いに気づいていない様子で覗き込んできた。

「うっん。人に説明をするって難しいなあと思い知っていただけよ……で、書き出しと展開のきっかけはとりあえず良いけど、これからどうしていくの？ まだ光昭のやるうとしてしていることどころかその目的すら決まっていないわよ」

「そこだな。だが、大きくは決めている。一応、社会に対して何らかの目的を持って行動しているという設定は考えている」

「それ、かなり大雑把よね？」

「それを決めるので、菜々君の知識だよ！」

「つまり、私に考えろと？」

菜々が呆れ気味に聞くと、賀集はまじめな顔で頷いた。

「そうだ。しかし、大日本帝国が他国と戦争をするとか、勝たせる、負かせるというものはやめて欲しい。子どもに夢を与えたい。考え方、捉え方は色々あるが、人が人を殺めるのは事実だからな」

「んー……っと、色々断っておかなきゃいけないことがあるけど、とりあえず私は今の今までその発想そのものがなかったから、安心して」

大日本帝国としての日本は、第二次世界大戦の敗戦でなくなり、加えてその戦後に作られた憲法で戦争をしない旨が定められているものの、それほど詳しい歴史の知識もない菜々は、その経緯や事情などを説明できるはずもなく、面倒な説明をするならば、それ自体を省くことにした。

「では、どうする？ なるべく、世界という規模で影響を与えるものにしたいのだが」

「……そうねえ。よく聞く話題だと、少子高齢社会とか、税率引き上げ、肉野菜の特売日。……ああ、地球温暖化ってのは良いかもしれないわ」

「地球温暖化？ 聞いたことがあるような無い様な名前だな」

首を傾げた賀集に菜々は、受験勉強で仕入れた知識を思い出しな

がら説明する。

「つまり、名前の通りで、この星、地球が暖まってしまう現象よ。産業革命はあったんだから、燃料を燃やすことで電気とかの多くのエネルギーが手に入れられることはわかっているわよね？」

頷く賀集。菜々は続けた。

「燃料を燃やすということは、二酸化炭素を代表とするガスが出てくるのはわかるわよね？」

「一応、人並み以上の学はあると思っているよ」

「うん。その二酸化炭素とか、他には……確かメタンね。それらは温室効果ガスっていう………なんというか、これがたくさんあると温室みたいに地球がどんどん気温が下がらないで上がっちゃうのよ」

「未来は冬でも寒くないのか？」

真顔で聞く賀集。菜々は困ったという表情を浮かべつつ、たどたどしく宙に指で円を描きながら説明する。

「そういう意味じゃなくて………温かくなりやすく、冷めにくい？

あ、でも温度差が大きくなるともいうから、気温が下がるの？」

「聞いているのは自分だぞ。聞かれても答えられない」

「まあ………とりあえず、温室効果ガスってのは、全くないとそれはそれでさむくなっちゃうのよ。でも多すぎると、これも問題で気温が上がってしまうの。それで、大雨が降って洪水になったりするわ。あとは南極の氷が溶けて、海面が上昇するの。確か、それで海の中に沈んじゃう島もあるって話よ」

ちなみに彼女が言っている事は少し間違っている。正しくは、太陽放射エネルギーは主に波長を持つ光として地球の地表に注ぎ、熱に変換される。同時に反射された光は遠赤外線などが一般的に知られる波長の長い光になる。この多くは地球から放射熱として宇宙に排出されるが、それを雲などが含む水蒸気などの温室効果ガスに邪魔されて再び大気や地表に戻される。温室効果ガスがなければ、この熱の行き来である熱収支が減り、地球は生物の住めない極寒の星になってしまいが、多くなるとこの収支が増えて、結果地球の平均

気温は上昇してしまうのである。

また、気温差などの環境の変化の原因に、地球が水の惑星である事がある。水の蒸発なども熱収支に影響を与える。この水が蒸発する際の熱を潜熱といい、これが大きくなるという事は、水蒸気を大量に大気へ上昇させている事を意味し、集中豪雨や台風の増加に繋がる原因とされる。

しかし、蒸発による海面低下よりも深刻なのが、菜々の言った南極大陸に蓄えられている氷の融解による海面の上昇である。これによって、海拔の高い場所の地下水が塩害を起す可能性や、反対に海中の塩分低下による漁獲量の低下の可能性が考えられている。しかし、それ以上に問題が顕著になっているのが、菜々の言った海拔の低い島の沈没である。この被害で、もっとも世界的に有名な国家は、太平洋上の島国、ツバル国であろう。海岸の浸食により、首都フナフティの海岸も次第に砂浜が減っており、近い将来に環境難民が生まれる可能性が高いとされる。

「アトランティスの様な話だな」

「物語じゃなくて、現実の未来の話よ」

菜々が真剣な目をして訴えた。口で説明できなくても、そのことの重大さは理解できていると思っっている。

「わかっている。しかし、その世界規模の危機に逸早く光昭は気がつき、その地球温暖化を阻止しようと活動するという展開は面白そうだ。例え、非現実的なことでも、その為に彼は物騒な方法で危機感のない人々への啓発活動をするというシナリオは、物語的に面白い」

「いつか本当に現れそうな話だけどね……………」

菜々は活き活きと話す賀集に苦笑しつつ言った。

「ふふっ、まさかテレビで写っているとはね」

薄っすらと白い埃の舞う暗闇の中に、若い男の声が響いた。かなり広い空間の中にいるらしい。声の主をボンヤリと照らすのは、テ

テレビの映像を写す光だ。

「首領、本当に、できるんでしょうか？」

「馬鹿だな。可能か否かの問題ではないだろうか？ やるか、やらな
いかさ」

闇の中から発言した子分らしき男の声に、先ほどの声が一蹴する。
「それに、こいつも手に入り、あれも時機に完成する。今更、後戻
りはできない」

言葉が続け、声の主が立ち上がると、テレビ映像を映写する光に
その顔が照らされた。女性的な容姿の美少年の顔がそこにはあった。
光昭だ。

そして、光昭の視線の先には、黒い巨大な影が物言わずそびえて
いた。

「ふうー」

荷物を持つて菜々の部屋から出てきた賀集は、玄関まで出ると大
きく息を吐いた。続いて肺に満ちる外の空気が疲労を幾分か軽くす
る。空はすっかり夕焼けに赤く染まっている。

菜々のアイディアは湯水の如くわいてくるのはいいのだが、それ
を実際に文章にするのは賀集の仕事であり、正直彼が一度にこれほ
ど大量の原稿を執筆するのは初めてだった。

賀集は、鞆に入った原稿用紙を見る。

「……………結構書いたな。ちよつとした短編一つ分位か？」

蹠鞘炎気味の手にずっしりとその重さが改めてかかる。しかも、
その半分以上が没原稿である。

「はあー」

思わず出てしまう溜息に、賀集は苦笑した。これでは作家になる
など程遠いと自嘲してしまう。

改めて荷物を持ち直すと、賀集は門に向かって歩く。

「賀集一樹君！」

「！」

玄関と門の丁度真ん中辺りに差し掛かったところで、突然名前を呼ばれ、賀集は驚いて振り向いた。

「……だね？」

振り向いた先、玄関の脇には半袖のシャツを着た青年が立っていた。

「はい。……あなたは？」

「なな子の兄、岩倉九胤です。……一寸良いかね？」

岩倉九胤に問われ、賀集は頷いた。

「さて、今日で一週間になる。そして、流石にそろそろ学校に行かないと処罰の対象になりかねない。和昭、やっぱり二度も同じ場所に光昭さんは現れないのではないのかい？」

炎天下の中、上野公園の木陰に腰をかけた成平が和昭に言った。

その手には表面が溶けてキラキラと輝くアイスキャンデーがある。

ちなみに、二人とも校則を守り、授業をサボタアジユしていても制服を着ている。

「では、他に何か良い考えがあるか？ 俺はこれ以外思いつかない。兄貴を見つけて、その後を追う！ それ以外な」

「確かにそうだけど……」

正直、近年の気温上昇は異常であり、外にいるだけでも過酷と云える。学校の先生曰く、地球温暖化と云われる現象によって、まるで焼け石の上に立っているかのような酷暑が連日続いている。

「文句があるなら、クウラアをここに持って来いよ！」

「無茶を言うなよ」

暑さと全く兄の気配を見つucker事のできない現状に苛々とする和昭が無茶苦茶な注文をする。クウラアとは、ストオブの対になる様な冷房装置のことで、この二十一世紀において設置されていない部屋の方が少ないと云えるモノだ。しかし、ストオブ同様、持ち運べるモノではない。

「とはいえ、策がないわけじゃない。こんなこともあるのかと小型

扇風機を持ってきた。……うわっ！　アイスがあ！」

いつもの如く自慢げに成平が鞆を探ろうとすると、溶けかけていたアイスクャンデイがボトリと棒から地面に落ちた。途端に成平が情けない声を上げる。

「アイスクらいまた買えばいいだろう？　それより、早く出してくれよ」

「わかりましたよ」

成平は半ばやけくそに、すっかりアイスクャンデイのなくなった棒を捨てると鞆から小型扇風機を取り出した。電池式の小型扇風機は、片手で持てる大きさと十分な風力を起せる夏の必需品の一つといえる。また、夜間外出の際には、懐中電灯としても機能する。

「あー涼しい。……が、これは焼け石に水だな」

「これからは酷暑に扇風機だな。……ん？　おい」

交替で小型扇風機の風に当たりながらその様なやりとりをしていると、成平が、待ちに待った光昭の姿を人込みの中に見つけた。

直ぐに和昭もその姿を見つけ、二人は顔を合わせた。二人はお互い頷くと、光昭の尾行を開始した。

九胤に案内されたのは、庭の外れにある離れであった。この木造建築の離れは、菜々の部屋の窓からも若干見えていたが、今まで賀集は物置だろうと思っていた。つまり、その様な建物なのだ。

「さ、上がって下さい。何、母屋の様な西洋かぶれの上品なもてなしは致しません。楽にどうぞ」

引き戸をガラガラと音を立てて開けた九胤は、そう言いながら賀集を中へ促す。離れの中を見ると、成程まさに下町の長屋を彷彿させる内装であった。入って直ぐに半畳程の玄関が申し訳程度にあり、その脇には洗面所と風呂、台所がある。しかし、台所には土間と竈がない代わりに板張りの床の上に石造りの流しとガスかまどが備えられているところは、流石岩倉家だと賀集は思った。

九胤は賀集を促し、板張りの台所の先にある襖を開けた。至極普

通の畳八枚が敷かれた部屋があった。部屋の隅には畳まれた布団、もう一方には書き物机と座椅子。部屋の中央には、円形のちゃぶ台。そして、窓と押入れがある。

「緊張感のない部屋でしょう?」

一端風呂へ消えた九胤がラムネを持って戻ってくると、部屋の中で立ち尽くす賀集に笑いながら言った。

「あ、どうぞお掛けになって下さい。ラムネです。氷水で冷やしていたので美味しいですよ」

「あ、有難うございます」

賀集は会釈をしながら、ひんやりと手に冷たさが伝わるビンを受け取り、腰を下ろした。

「ここは僕の基地みたいなものです。勉強に集中したいと父に相談して、物置となっていた離れを空けてもらったんです。……大正君から話は聞いてますよ」

九胤はグビツと喉を鳴らして飲んだラムネをちゃぶ台に置くと言った。この言葉で、賀集は初めて彼が大正の話していた帝大の先輩であると気がついた。

「つまり、あなたが大正に菜々君のことを話した張本人、自分が彼女と小説を書くことになった大本の原因となった方ですか」

「中々言うね」

久胤は苦笑しつつ言った。

「すみません。厳しい編集者と執筆をした後なもので」

賀集はつい嫌味な台詞を吐いた事をわびる。

「いいや、構わない。むしろ、僕はそういう言い回しを言える者の方が好きだ。この不況などで世俗が困窮している時世だ、権力を誇示する相手にも対等に立てる最後の力となれば、ここと口くらいだ」

九胤は自らの頭を指しながら言った。

「それで大正を気に入っているという訳ですか」

「まさに。彼はこの国を変えるほどの才能を持つ者だよ」

彼の目を見て、賀集はその言葉が本心であると理解した。

「成程。それで、自分をここへ招いたのは大正の話をするためでしょうか？」

「いいや。なな子の事だ」

それを聞いて賀集は、やはりな、と思った。

「正直に言つと、君には感謝していません。アレ以来、なな子はずっと空想にふけていました。君のお陰で、なな子は笑うようになった」
伏目がちに微笑して言った九胤に賀集は違和感を持った。本心を言っている様で、どこか偽りがその目に見えた。しかし、彼の視線は一瞬で外れ、畳の染みを呆然と見つめていた。

「アレというのは、彼女が自殺未遂をしたことですね？」

彼は呆然としたまま、はい、とだけ返し、顔を上げたかと思えば、垂れた水滴がすっかり水溜りとなったラムネのビンを取ると、グビツと飲んだ。

「うつ……、そうです。この家の庭に池があるのはご存知で？」

軽くゲップをした九胤が聞いた。

「そういえば、ありますね。丁度この離れと反対側に。まだ自分は近くで見た事はありませんが」

賀集が答えると、視線を畳に下ろした彼は、そのまま頷いた。

「はい。そこで、なな子は身を投げたんです。……恐らく明け方頃の事なのでしょう。使用人の一人がすぐに気がついて助けたのですが、かなり危ない状態でした」

「……………ん？ 何故それが自殺だと？ 遺書があつたのですか？」

「いいえ、しかしその数日前からなな子の様子がおかしかったので。理由はわかりませんが、何か悩みを抱えていた様です」

「それは……………全くわからないのですか？」

「え？」

「……………」

賀集が聞くと、彼は顔を上げ、視線を賀集と合わせた。やはり何かを偽っていた。

「……………なな子がベッドと布で結ばれているのはご存知ですよね？」

「それは、彼女が窓から出ようとしたのを、投身しようとしたかもしれないと考えているからですよね？」

「それは、なな子に対する言い訳です。勿論、それも理由の一つであるのは事実です。しかし、僕らにはなな子を外へ出す訳には行かない事情があるんです」

「彼女が中沢菜々だという……」

「それだけではないのです！」

賀集が皆まで言う前に九胤は発した。そして、その大きな声に対して、極端に小さくなつた声でポツリと言った。

「なな子は、患っているのです。医師もまだ現状でははっきりと診断ができていないのですが、恐らく頭に……。その医師の話ですと彼女はいつ爆発するかとわからない爆弾を背負っている状態にあるのだそうです。そして、その爆発が……前兆でも起れば、その時初めて病の特定ができるという状態だそうです。しかし、その時は、恐らく手遅れとなるだろうとも」

九胤の言葉に偽りはなかった。つまり、それを悟つた彼女は、自ら死を選んだという事なのだろう。しかし、それは今の菜々に聞いても答えはわからないに違いない。

「幸か不幸か、なな子は一種の記憶障害になつている様です。僕ら家族としては、なな子の現状は非常に複雑な心境なのです」

自殺の理由を忘れている代わりに、自らを別人だと思ひ込む。間違いであっても可能な限り生きていて欲しいという気持ちと、本来の彼女を思い出してほしいという気持ちで、彼らは悩んでいるのだろう。そして、賀集に対するゆきの対応にも納得ができた。

しかし、同時に菜々が実はなな子が現実逃避の中で生まれたもう一つの人格なのではないかという考えが賀集の頭を過ぎつた。菜々が本気で信じていたら、未来を直接見た訳ではない賀集には判断する事ができない。

「……僕が、賀集さんをお願いしたいのは一つです。彼女が二度とあんな馬鹿なことをしない様にして欲しい。それだけです」

九胤の目に、偽りはなかった。

伍

「……だけど、なんで俺達は兄貴を尾行しているんだ？」

上野公園で、行き交う人々の隙間を縫いながら光昭の後を追う最中、和昭が不意に成平に聞いた。

成平は嘆息しつつ言った。

「何を言っているんだい。光昭さんは自らの意思で僕らの前から姿をくらましたんだ。つまり、僕らにこれからしようとしていることを知られたくないと思っている。それで、もし僕らが話しかけてみるよ」

「逃げられるか、話をはぐらかされる」

「そう言うこと」

成平は頷いて言った。しかし、二人の視線は、常に前方を歩く光昭から逸らさない。

光昭は、着勝手の良い半袖の洋服姿で、片手には半透明の袋を持っていた。

「あれはコンビニの袋だ」

成平は目を凝らすと言った。コンビニというのは、二十一世紀の日本中にある年中無休二十四時間昼夜営業を行う雑貨商店の総称である。握り飯や弁当など多数の飲食物を始め、何でも取り扱っている便利な店である。

「よく見えるな？」

「僕は遠視目だ。遠くの物に関しては、並の人よりも良いよ。……

食料かな？」

「さあな。何せコンビニだ。武器の可能性だってある」

和昭は声を落として言った。一瞬、成平の背筋を冷たい汗が流れる。

そうこうしている内に、光昭は不忍池の前まで移動した。彼は周囲の様子を伺いながら、池の脇にある用具倉庫の裏へと隠れた。

咄嗟に木陰に身を隠した二人は、直ぐに用具倉庫へと駆け寄った。慎重に物音を立てない様に近づき、用具倉庫の裏をゆっくりと覗き込んだ。

「あれ？」

「いない」

そこには光昭の姿はなかった。茂みの中へ入った可能性もあるが、うっそうと茂る草木を人が歩けば、その形跡があるはずであるが、それは用具倉庫の裏の僅かな空間だけで消えていた。

「まさか……消えた？」

青ざめた顔で呟く和昭の肩を、成平は叩いた。

「足元をご覧よ」

「ん？……あ」

和昭の足の下には、下水道の排水溝があった。しかも、よく見るとその蓋は金属製ではなく、軽い木製になっており、その周囲の土が擦れていてごく最近に動かされた形跡がある。

「この下だ」

「しかし、下水道だぞ？ 行っても大丈夫か？」

「大丈夫だろう。光昭さんが下りているんだし、雨水を流す為の物だと思っから、トイレの排水とかは流れていないと思う」

「そうではなくて、装備もなしに下りれるのか？」

和昭が聞くと、成平は指を振る。

「大丈夫。こんなこともあるつかと小型扇風機と頭部に装着できる小型電灯を持ってきている」

成平は自慢げに鞆の中から、先の小型扇風機と小型電灯が付いたハチマキを取り出した。

「よし、俺から行く！」

和昭は勢い込んで成平の手か小型電灯を取ると頭に結ぶ。

「いいけど、気をつけるよ？ 落ちたら大変だ」

排水溝の木蓋を開ける成平が注意を促すが、和昭はそんなことを気にする様子もなく、吸い込まれそうな漆黒の闇に包まれた排水溝

の中へと下りていく。

「大丈夫だ。俺が落ちる訳ないだろう……がつああああああ！」
昇降用の釘に足をかけて下りる和昭は、余裕を見せて片手をひらひらと振る。が、その直後、足をかけそこない真っ直ぐ排水溝の底へ落ちていった。

「だったら、ケータイ使えばいいじゃない」

翌日も、賀集はいつもと変わらず菜々の部屋に来ていた。岩倉邸に着くまではどうにも菜々への接し方に悩んでいた賀集であったが、いざ部屋に入ってみれば小説執筆に思考は切り替わり、菜々が何者であるか、自殺の理由は何かなどという雑念は一瞬でどうでもよくなった。

「ケータイ？ それは道具なのか？」

賀集は菜々に聞いた。賀集は、菜々に屋外で他の人と連絡する手段はないかと聞いたのだ。その返しが、先の返答である。

「携帯電話よ、これは名前のまま。電話がこれくらいのおおきさで電波が入ればどこでも電話もメールもできるわ」

菜々は手で携帯電話の大きさを説明しながら言った。

「電波？ つまり、電波受信をすることで無線通信を可能にしているのか。……しかし、メールとは手紙の英語か？」

「そうね」

「……成程。他のものは送れないのか？ 例えば、写真や新聞などは」

「写真……写メなら、ほとんどのケータイができるわよ。新聞も、読める機種もあるって話は聞いたわ」

菜々はメモをまとめる賀集の質問に答える。彼は頷きながら、紙に携帯電話のメモ書きをまとめた。

「うん。実に未来世界的な道具だ。それで、その携帯電話は高校生の彼らが持つていても不思議な品ではないのかい？」

「まあ最近は子どもから持つているわよ。というか、高校生には必

需品ね。ちなみに、このメールのやり取りをする友達同士の事をメル友とか言ったりするわ」

「メル友？」

賀集が顔を上げる。菜々は頷いて説明する。

「そう。メル友達の略で、メル友。賀集さんも後80年くらい生きれば、私がメル友になつてあげるんだけどねえ」

「そんなに生きられるわけがないだろう？」

賀集は苦笑しつつ、紙にメル友達、略称メル友と書き記す。

「そんなのわからないじゃないの。未来の医療は凄いんだから！だから、約束よ。もし21世紀まで賀集さんが生きてたら、私とメル友になること！いいわね？」

「わかった、約束だ。……………それで、この携帯電話以外には、どんな便利な機械が存在する？」

「そりゃ色々あるわよ。でも、ケータイほど便利なものというと

……………あ、パソコンね」

「パソコン？」

賀集が首を傾げる。

「そう。確か、正式名称をパーソナルコンピュータ。略してパソコンね。元々は勝手に計算してくれる便利な算盤みたいなものだったらしいけど、私からすればインターネットを使う道具にしか過ぎないけど」

「インタアネット？ なんだい、それは？」

「うつ……………、難しいわね。アレは……………そう！ 世界中のパソコンと情報のやりとりができる仮想世界みたいなものよ！ さっき説明したメールもそのインターネットを使って送っているのよ」

「実に未来的な話だな。つまり、未来には仮想世界があつて、そのパソコンとやらがその出入り口なのか？」

「出入り口じゃないわ。窓口と言った方が近いと思う。パソコンって、算盤って説明したけど、形は画面とキーボードとマウスがある……………あーもう！ 描いて説明する！」

菜々は、賀集から紙をひつたくると、デスクトップパソコンの絵を描く。

「……………コレが、画面で、これがキーボードで、これがマウスで、これが本体。……………わかる？」

「モノはわかったが、今一自分には理解できない」
「だよねえ」

予想通りの回答に、菜々は溜息をついた。同時にその体がブルツと震えた。

「どうした？」

「うつん、ちよつと寒気。なな子さんは冷え性かしら？」

菜々は両腕をさすりながら呟いた。よくよく思い起こすと、少し風邪気味の様で気だるそうにしている事が今日は多かった。

「風邪気味なのかもしれないな。……………今日はもう切り上げた方がいいかもしれない」

「何を言うの！ まだパソコンの説明が終わっていないわ！」

菜々は使命感に駆られた兵士の如く、拳を握り締めて賀集に訴えた。そして、賀集が椅子に座りなおして嘆息するのを確認すると、菜々は手を打った。

「こつちのパソコンならややこしい説明をしなくていいわ。……………これよ！」

再び紙に菜々はパソコンを描く。今度は俗にノート型と云われるラップトップパソコンの絵だ。

「その名もノート型パソコンよ」

「成程、大学ノオトの形を模しているのか。……………しかし、それでは向きが縦横逆だな」

「うう……………妙に細かいところを気にするわね。いいのよ、大きさと形がノートを彷彿させるんだから！」

「あ、嗚呼」

最早、強硬的と云える主張で賀集に無理やり納得させ、菜々は説明を続ける。

「こつちの上が、画面。この中に文字や画像が表示されるの。そして、下がさつきから出てるキーボード。文字を打ち込むところで、タイプライターと同じよ」

「成程な。やっと理解できた。タイプライターで打ち込む文字が、紙の代わりに画面に打ち出される訳だな？」

「そうそう！ 流石、賀集さん！ 空想小説作家の肩書きは伊達じゃないわね！」

久しぶりに会話が成立して、菜々は感激して賀集を褒め称える。

「おいおい、まだ作家になった訳ではないよ」

賀集は照れながら訂正する。そして、彼は絵のパソコンから伸びるマウスを指差した。

「で、これは？」

「マウスよ」

「……鼠？」

「まあ、それっぽい形だから付いた名前だった気がするけど。マウスは画面で動かす指みたいなモノの操作装置よ。ほら、パソコンって文字を打つだけじゃなくて計算したり、他のパソコンと情報のやりとりをしたりするから、どこを操作するのか、選ばなきゃならないじゃない？ でも、画面を直接指で押しても、それでどこを選んでいるか分かる程、技術の進歩は一般的になっていないのよ。だから、それを画面の中で指の代わりに動いてもらうモノを操作するモノがマウスなのよ」

「……遠隔操作している訳か。……実に未来的だけど、説明し難いな。奈々君、これは一応画面でその操作ができるモノも現れる見込みはあるんだよな？ 大正の世に生きる自分が思いつく位のことだ」「うん。値段は高いけど、売っているわよ」

「なら、その方がいい。何より、自分が理解できる範囲の限界だ」
一人納得して、賀集はパソコンについての内容を紙にまとめる。

残念ながら、この時菜々は件の気だるさでインターネットについての説明が疎かであったことをすっかり忘れていた。

そして、菜々は話題を変えて、ポツリと言った。

「ねえ、賀集さん」

「ん？ 少し待ってくれ。今まとめ終わるから……」

「私、外に出てみたい」

紙にパソコンを説明する文字と絵を書いていた賀集が顔を上げた。「だって、ずっと私はここにいるんだもの。賀集さんが21世紀に興味があるのと同じくらい、私もこの時代に興味があるのよ。活動写真だって見てみたいし、仮設の上野駅だって見てみたい」

「だが、君は……」

思わず昨日の九胤の話を使いそうになり、その言葉をぐつと飲み込む。

一方、菜々は真剣な眼差しで言い聞かせる様にその思いを語った。「賀集さん、私はまだこの部屋の景色しか見た事がないの。こんな考えはいけない事だけど、可能性だけで言ったら、実は大正時代じやなくて21世紀で、賀集さんを含めて皆がグルになって私を騙しているって考えられるのよ？ 私は、真剣に私を信じてくれた賀集さんを信じている。でも、私もここが本当に大正時代の東京だって、真剣に受け入れたいの。そうしないと、先に進めない。だから、お願い！ 賀集さん、岩倉の人達に何とか私を外出できる様にお願いして！」

その言葉を聞いて、賀集は初めて菜々も自分と同じく、信じる思いの反面に懐かすにはいられない僅かな疑念に悩んでいた事に気がついた。

「……わかった。頼んでみよう！」

「ありがとう！」

礼を言う菜々の瞳には、光るモノがあった。

「大丈夫か、和昭？」

慎重に小型扇風機の電灯で手元足元を照らしながら排水溝の底へ下りた成平が足元で尻を摩る和昭に聞いた。しかし、その声にさし

て心配している気持ちは籠っていない。

「もう少し心配しろよ。嗚呼、尻餅をついた。痛い痛い」

「だから心配していないんだ。見上げてみるよ。この高さだと普通は骨折程度で済むかもわからないほどの重症を負うよ。君の場合、清水の舞台から落ちた時も無事だったからね」

成平は呆れ気味に上を見上げて言った。空はかなり小さく見える。地上ならば建物の二三階から落下したのと変わらない高さである。

「無事ではない。捻挫をした」

和昭は中学校の修学旅行で行った京都の清水寺で、風に飛ばされた女子生徒のハンカチを取るために跳んだ拍子に清水の舞台から落下したことがある。しかし、心配する皆を他所に彼は傷だらけの服をまとい、泥に汚れたハンカチを持って自力で戻ってきていた。ちなみに、捻挫も一週間とかからず完治している。詰まる所は頑丈なのだ。

「さて、茶番はこの辺にして光昭さんの行った方向だ」

「茶番と言ふな。……とはいえ、どっちだろうな」

彼らの前には雨水を下水道が川のように流れていた。問題は、その上流か下流かのどちらかに光昭が進んだのかということである。

「この下水道の地図があれば見当も付けられるのだが……」

和昭が悔しげに言った。その肩を成平は指で突いた。見れば彼はニヤニヤと笑っている。

「こんなこともあるうかとパソコンとケイタイを持ってきている」

成平は湿った地面に少し眉を曇らせつつ座り込み、鞆から大学ノートのような形の機械と掌に収まる程の小さな木箱を取り出した。

大学ノートに似たそれは、紙ではなく硬い板状の素材で出来たパソコンと云う機械で、成平はそれをアルバムを開く様に開いた。本やノートとは違い、これは横にして使用する。上に位置する片面には画面があり、下の片面にはタイプライタアの入力部分と同様に文字が並んでいる。この文字を押すと画面にその文字が打たれる。タイプライタアの紙に当たる。しかし、このパソコンは文字を入力す

る機械ではない。高度な計算をこなす自動計算機としての機能も担い、何よりもインターネットと云う仮想世界とのやり取りが出来るのである。

インターネットは、世界中のパソコン同士が電話回線の様に繋がり、そのつながりが網の目の如く同時に通信を行うことを可能にした仮想世界なのである。パソコンは、その一種の窓口としての機能も持っているのだ。

そして、ケータイと云う小さな木箱は、正式名称を携帯電話機と云い、文字通り電話機が小型無線化したものである。しかし、その機能はただの電話機としてのものではない。

「パソコンとケータイなんか出して何をするつもりだ？」

「まあ見ているよ」

成平は慣れた手つきで、画面と入力部分进行操作する。画面は指で触れるとまるでそこに存在するものを動かすかのように自在に操作することが出来る。

やがてパソコンの画面に地図が表示された。

「これは？」

「この地下水道の地図さ。さて、このままでは使い勝手が悪い。そこで、メエルを使う」

成平は画面の隅にいた猫の姿をした絵に触れた。猫はテクテクと画面の中を移動し、地図を封筒に入れる。成平はその封筒を指で示すと、封筒の宛先と宛名に自分の住所と名前を入力し、送り先をケータイへ指定した。

「よし。これで……届いた」

直ぐにケータイの鼓笛のように広がった受話口から封筒が出てきた。これがケータイの便利な機能の一つである。ちなみに、こちらからも通話口に手紙を入れれば相手に送ることができ、相手は受話口から受け取ることもパソコンから見ることが可能である。

「相変わらず便利だな」

和昭は封筒の中から地下水道の地図を出しながらしみじみと言っ

た。

「だったら和昭もケイタイやパソコンを買いなよ。今時、ケイタイを持たない高校生の方が珍しい」

「俺は機械類が苦手だ。ところで、さっきの猫はなんだ？ そんなのあつたか？」

和昭は思い出した様子で、パソコンとケイタイを鞆にしまつ成平に聞いた。

「あれは俺がパソコンの中で作った助手みたいなものだよ。多くの機能をもたせていてね。インタアネットの中から必要な情報も見つけてくれたり、先刻みたいにパソコンの機能を使う時に手伝つてくれたりする」

「そいつは凄いな。……おい、これを見るよ」

「どうした？」

鞆を肩にかけると、和昭が示す地図の部分を見る。位置は現在位置の下流、丁度不忍池の真下に位置する部分に広い空間が存在している。

「ここに何かありそうだな」

「確かに、距離もこの排水溝が最も近い場所になっている。可能性は高いね」

「よし、行こう！」

二人は、地下水道を下流に向かって歩き始めた。

菜々と約束をしたものの、実際誰に頼むのがいいのであろうかとトイレで用を足しながら賀集は考えていた。昨日の今日で、九胤に頼むのは流石に気が引けた。彼に納得して協力してもらうには、家族の中でもう一人くらいは協力者が必要だった。菜々から聞いた未来から来た猫型ロボットの道具があれば、こんなこともかなえてくれるのだろうが、とつい考えてしまう。

「はぁー……言うは易く行うは難しという事か」

「口は禍の門とも言つわ」

トイレから出て、溜息と共に呟いた言葉に女性の言葉が返ってきた。賀集は目を大きくして声のした方に振り返る。そこには、岩倉ゆきの姿があった。

「まだ続けていたのね」

「ええ。自分は彼女の言葉を信じていますから」

相変わらず敵意を持った対応をしてくるゆきに賀集は、偽りのない言葉を言った。菜々の言葉が事実なのかはわからなくても、その言葉に嘘は無い。

「……でも、最近はなな子の方から話しかけてくれる様になったし、その目も生きる希望に満ちている。そこは、あなたに感謝すべき事ね」

一瞬だが、ゆきの目尻が動いた。微笑んだ。そして、感謝の言葉に嘘はない。

「……ゆきさんは、どの様に考えているのですか？ その、なな子さんの言葉を」

「信じられる訳がないでしょ？ だって、未来人よ？ あの子は私の妹。それは私が一番よく知っている。でも、なな子はそれを納得していない。……こんな事、部外者のあなたに言う必要はないけど、あの子の抱えている事情は特別なの。なな子が現実から逃げているのは仕方ないけど、私は現実を受け止めて、それでも生きようと思っただけ」

ゆきの言うのは、自殺と病気のことだろう。しかし、賀集にはゆきの意見が納得できなかった。思わず、声が荒くなる。

「それは手前の言い分だろ？ それを彼女に本当に求めてんなら、言ってみろよ！ 口は禍の門なのは、手前の考えだろ。現実を受け止めるなんて、本当に言えるのか？ それは手前の勝手なエゴだろ？ それが出来ない手前は、恐れているんだ。理解しているんだ。

自分の死が近いことや、それを苦しんで、それこそ自らの手でその苦しみから逃れようとした彼女に、お前は現実を受け止めるって言えない。そして、言ったところで彼女はもう一度同じ事を繰り返す

ただだとわかっている。だから、言えないのだから？」

「違う！」

ゆきは即座に否定する。嘘だった。

「まず現実を受け入れるのは、手前自身の方だろ？ 違うのか？」

「……………」

ゆきは閉口した。その瞳は潤んでいる。

そして、溢れた。その瞬間に、言い過ぎたと賀集は反省した。

「それは受け入れるというのも、難しい話だろうが。…………まず、彼女の言葉を尊重してあげるといえるのはできるんじゃないか？ もし彼女がなな子であっても、今の彼女は中沢菜々なんだ。それを否定するのではなく、尊重してやるのも、必要なんじゃないか？ 少なくとも、彼女はそれに応えてくれるだけの心がある」

「うん…………それは、わかっているわ。毎晩、就寝前には必ずなな子のところに行くようにしているの。…………今までは何も会話がなくて本当に形式だけの見舞いだったけど、最近は変わったわ。活動写真がどういうものかとか、地下鉄の完成はいつかとか、銀座の建物はどうなっているとか、バスガールはどんな格好をしているのかとか…………何時だったかは、どんな下着は普及しているのかとかまで聞かれたわ。はじめは私も怪訝に思ったけど、答えてあげるとあの子、目が輝くの。それこそ、好奇心旺盛な少女の目よ。…………なな子は、淑やかで感性豊かな、絵を描いたり、本を読むのが好きな子だったけど、あんな前向きな目をする子ではなかった」

ゆきの声は、次第に明るくなっていく。それは賀集も感じていたことだった。

菜々は決して絶望しても、逃げることはしない強さがあり、現実を受け止めた上で自分の希望に進める前向きな心がある。それは、話す相手にも伝染する。だから、菜々に会えば、菜々の正体についてやなな子の事に関する悩みもどうにかできる気がしてくる。

「あの子が本当は何者なのか、もしかしたら私にとって、もうそれはあまり関係のないことなのかもしれない。結局、私が岩倉の人間

で、あの子の姉だから、受け入れられないというだけ。……やつぱり自分勝手かしら？」

「いいや。それでいいんだ。誰一人同じ考え方なんて出来ることなんてない。自分には自分の考えがあるし、ゆきさんにはゆきさんの考えがある。結局、菜々君に必要なのは、話ができる相手なんだ。自分を人として認めてくれる相手なんだ」

「うん、ありがとう。……賀集さん、一つ聞いていい？」

「はい」

「あなたは、あの子のことを好いているの？」

ゆきの言葉に、賀集は即座に答えられなかった。しかし、ゆつくりと言葉を搾り出す。

「……好意は、持っています。……しかし、恋愛感情とはいえませんが。大切な存在ではありません。……でも、それは言わば、妹や娘に抱くものに、近い感情です。……これでは、いけませんか？」

賀集は恐る恐るゆきに聞いた。毎日通いつめる年頃の男の説明というには、納得しがたいものだと言集自身が思っているのだ。

しかし、ゆきの反応はその予想を反した。

「いいえ。……安心しました」

「え？」

ゆきは淡々とした口調で語りだした。

「あなたも時機に耳に届くとは思いますが、私達の父、今は仕事でこの家にはいませんが、なな子の事情もあなたのことも知っています。父としては、今の岩倉の家若い男が入りしていることあまり快く思っていないかもしれません。ましては、世間では気違いと言われる仕事のない状況になっているなな子のところとなると、尚のことです。あなたは気がついていないのかもしれませんが、あなたがなな子の部屋に毎日現れている事は、すでに周囲の噂になっています。なな子の自殺未遂の話も外で噂になっています。お恥ずかしいことに、使用人が周囲にもらしているでしょう。今更あなたの存在を隠せる状況ではないのです。……実業家としての父の立場もありま

す。妥協策を既に練っているとだけ、話しておきます」

「はあ」

どうにもゆきの言葉の真意が掴めない賀集は曖昧な声を発した。

それにゆきは軽く微笑むと、一転柔らかい口調で言う。

「こうしてあなたと話ができてよかったわ。ごめんなさいね、長々と立ち話につき合わせてしまつて。……賀集さん、もし私にも協力ができることがあったら、遠慮なく言つて。あなたがなな子を信じると言つたように、私もあなたを信じるわ」

「ありがとうございます。……あ、そのいきなりお言葉に甘えても宜しいですか？」

賀集は、一瞬躊躇したものの、ゆきに菜々が外出をしたいと言っている旨を説明した。ゆきも彼女の体を心配したものの、家族への説得を承諾してくれた。

『この世界を蝕む病を治しに行きます。光昭』

暗い地下水道を歩く成平の脳裏に、光昭が行方をくらます際に残した僅か一文の書置きを浮かべていた。

「この扉だな」

「嗚呼」

やがて二人が立ち止つた壁には、重厚な金属製の扉があつた。二人はゆっくりと慎重にその扉を開いた。

扉の隙間から暗い地下水道に光がもれる。二人はゆっくりとその隙間から中を窺う。その空間はかなり広い様子だが、彼らの位置からは中に何かあるのかまではわからない。

二人は意を決して、和昭、成平と順に中へ入つた。

「こ、これは！」

「凄い……」

二人は我が目を疑つた。その眼前に広がる空間は、体育競技場にも匹敵するほどの広さがあり、その中心に鎮座するのは巨大な金属製の龍であつた。正しくは龍の頭部で、その後ろに円柱形の胴体が

伸びている。絵巻などで描かれる龍よりも遥かに短く、そのシルエツトはどちらかといえばツチノコに印象は近い。

「なんだ、これは？」

「……龍鳳」

驚きつつ成平は呟いた。それは、一週間前にテレビで報じていた盗まれた最新型の飛行潜水艦の名前であった。あれから数日間連日、報じられていたが、犯人の見当も手がかりも得られていない状況であると伝えられていた。

成平は手短かに和昭にその事を説明した。

「つまりは、兄貴がその窃盗団の仲間だってことか？」

和昭が愕然と言った。

「いいや、窃盗団ではない。そして、僕は只の仲間ではなく、首領だ」

突然の声に二人は声のした上方を見上げた。一階層分上にある足場に立つ光昭の姿があった。

「兄貴！」

「光昭さん！」

「おっと、すまないね。感動の再会という演出はできないんだ。僕にも色々都合があつてね。でも、ここまで来た君たち二人は敬意に値するよ。何せ警察も見つけられない秘密基地だからね」

光昭は笑顔を二人に向けて言った。

「なんだって、こんなことを？」

「答える、兄貴！」

二人が喧々囂々と声を上げる。それに対して、光昭は右手を前に出して制する。

「すまないね。君たちにゆっくりと説明してあげたいのだけど、今の状態では少し都合が悪いんだ。……何せ君たちはこの基地の侵入者だ。ここの主として、その敬意の証を示す必要がある。……やりたまえ！」

彼の号令と共に、続々と黒服を着た若い男達が現れた。その手に

は各々が武器を持っている。

「うっ！……って、おい！」

その光景に怖気づく成平の前に立ったのは、不敵に笑う和昭であった。

「兄貴、俺がこの程度で怖気づくとも思ったか？ その敬意とやらは、倍にして返してやるぜ！」

和昭は拳を構えて言い放った。

直後、相手達は雄雄しく野太い声を上げて襲い掛かってきた。しかし、和昭はそれに立ち向かう。

まずは金属の長い棒を振るう長身の男。その棒が和昭の胸を狙うが、彼はそれを両手で受け止め、更に振り上げた。小柄な和昭のどこにその力があるのかはわからないが、長身の男はそのまま振り飛ばされて壁に体を打ち付けた。

そのまま奪い取った棒を振るい、次々に襲い掛かる者達を振り払う。その姿は齊天大聖孫悟空の如し。

「おいおい、その程度で俺に敵うと思っっているのか？」
棒を構えた和昭が不敵な面構えで豪語する。

「皆、弟に無駄な遠慮は無用だ」

光昭が手を叩き、言った。すると、彼らは打撃の武器を捨て、銃剣を各々取り出した。

「和昭、流石の君でも銃剣が相手では敵わないだろう？」

「どうかな？」

「冷静になれ、和昭。僕に君の死に様を見せてくれるな」

ニヤリと笑って言い返した和昭に光昭が悲痛な面持ちで訴えた。それを見て、和昭から不敵な笑みが消えた。

そして両手に棒を掴み直すと、瞬間的に殺気をその瞳に宿らせ、それを真つ直ぐ振り下ろすと同時に右膝を上げて金属の棒を挟んだ。棒は曲がり、それを地面に捨てた。

「投降する。すまないな、成平。……これでいいんだろ、兄貴？」

和昭に光昭は黙って頷くと、彼らに縄をかけようとする男達に言

う。

「おい、見ただろっ？ 彼にそんなものは無意味だよ。それに、こ
つちが武器を構えていれば、無茶なんてしないさ」

陸

賀集が大正明治と出合ったのは、1920年、大正9年の春のことであった。

当時、宇都宮の家で暮らしていた賀集は、尋常小学校を卒業し、祖父母の勧めで中学校に進学した。その中学校は、周辺の尋常小から進学してきた生徒も多く、賀集の知る顔も半数まではいかないものの、決して少ない数ではなかった。

しかし、入学後に彼が話しかけたのは、違う尋常小卒の大正明治であった。

その時分より、大正の思考や言動は子どもらしからぬ捻くれたものであった。それ故、同じ尋常小卒の学友達からは距離を置かれていた。彼はいつも教室の隅の机で窓の外を眺めていた。

ある日の授業でこんなことがあった。

「ではみなさんは、そういうふうには不死の山と云われたり、日本一の山と云われたりしていたこの富士山よりも高い、日本一高い山がほんとうは何かご承知ですか？」

先生は、黒い黒板に吊るした大きな日本の地図の、丁度真ん中近くに記された富士山のところを指しながら、みんなに問いかけた。

賀集が手をあげると、それから四五人の手が上がった。

しかし、大正は相変わらず退屈そうに窓の外を眺めていて、手を上げなかった。その様子を見附けた先生は、彼に聞いた。

「大正さん。あなたはわかっていいるのでしょうか？」

大正は面倒臭そうに立ち上がると、一切緊張する様子もなく淡々と答えた。

「新高山です。現在の観測結果では、標高が3950メートルとなっており、富士山の3776メートルよりも高くなります。したがって、日清戦争で日本統治下になって以後、日本一の山となります。」

他の生徒が皆、茫然自失になっているのを他所に、大正は先生の確認も取らずに着席をし、また窓の外を眺め始めた。

この出来事以降、大正は先生からも距離を置かれる様になった。しかし、賀集にとっては寧ろ逆であった。この一件で、彼が他人との距離を置く理由が、他人が自らと違うとはつきりと認識してしまっている為であるとわかったからだ。

それは、人の何気ない言動に隠された真偽すらも見抜いてしまう賀集自身が抱えていた悩みにも通じるものがあった。

「何の用だい？ 俺は君と話をする気などないのだが？」

数日経ったある下校途中、賀集は大正の後をついて行った。彼はしばらく歩いたところで、唐突に声を上げた。

「しかし、自分は君と話をしてみたいと思っっているんだ。君は他の人とは違う」

「だったら？ 君は見世物小屋を見るのが好きな変人かね？」

「いいや。同じ小屋にいる見世物だよ」

賀集の言葉が効いたのか、大正は振り向いて彼を見た。

「否。悪いが、俺には君も他の者と変わらない陳腐な一個の人間としか見えないな」

「ならば、何か聞いてみたらどうだい？ 確かに、難しい問いの回答を述べることはできないが、自分には君のする問いが正誤かを当てることができる」

賀集が挑戦的な表情で言うと、大正はそれを受けたという様子でニヤリと笑った。

「いいだろう。では、昨年の皆既日食で、太陽の傍らを通る星の光の曲がり方が、ニュートン力学から予想されるものの二倍であったと観測された。これから正しいと示されたアルベルト・アインシュタインの発表した理論は、特殊相対性理論であり、これを重力レンズ効果という。……さあ、これに間違っているものがあるかい？ それとも、全て真か？」

「特殊相対性理論という部分が間違っている」

「！」

賀集が大正の発言の中で偽りを言った部分を指摘すると、彼の瞳孔が一瞬にして大きくなった。

「そ、その正答は？」

彼の口調が明らかに変わった。動揺している。

「それはわからない。言っただろう？ 自分は正誤を当てることはできると」

「……一般相対性理論だ。それが正答だ。……君は一体？」

「自分は、人の言葉に真偽があるかを見抜いてしまう力があるんだ。だから、本心から人を信じることはできない。でも、君は例え偽りを持ってても、それを言わずに意見を言える才能がある」

「……肯定だ。しかし、良いのかい？ 俺は君を、己の言葉に嘘を含めずに裏切ることができるんだ。間違いなく、君は俺にいつか裏切られる。それでも、俺と友人になりたいのか？」

「その言葉に嘘はない。なら、自分も君に正面から向き合う。もし君が僕を裏切る時が来たら、自分も君に真っ向からその裏切りにある真実を見抜く」

賀集は、まっすぐに大正の目を見て言った。

彼は、口元だけを上げて微かな笑みを浮かべると、右手を差し出した。賀集も、それに応じ、硬い握手を交わした。

以後、6年間。賀集と大正の交流は続いている。そして、6年後の夏、賀集の元に彼から唐突に、上野駅に来いという電話がかかって来た。

光昭に先導され、二人は龍鳳の中に入った。近くで見ると、龍の口の部分には巨大な砲台らしきものが内臓されている。更に、胴体のうろこ状になっている表面にも魚雷発射口と考えられる穴が複数開いている。

「……光昭さん、この飛行潜水艦は一体？」

「見てわからないかい？ 海空両用の戦艦さ。警察がこいつを盗ん

だ事件捜査が一向に進まないのもそれが理由さ。表向きは財閥の個人所有艦として開発された代物だけど、その実体は財閥が世界中の軍部相手に手を広めている裏の商売の新商品ということだよ。だから、巧妙に龍鳳の資料も偽装されている。警察はいつまでも存在しない船を捜しているという訳さ。つまり、僕らがこの艦を狙ったのも、それが理由という訳だ。別にこれを使って直接人々を攻撃するつもりはないよ。精々保険程度さ」

「つまり、必要に駆られればこれの戦力も使うんですね？」
成平が揚げ足を取ると、光昭は細く笑った。

「君たちが邪魔さえ、しなければね。……さあ、着いた。君たちは実に運がいい」

廊下を歩いていた彼は、扉に突き当たり、立ち止まる。部下がすぐさま扉を開ける。

扉の先は、艦橋になっていた。しかし、そこには周囲が一望できるわけでも、窓があるわけでもない。巨大な画面が中央の壁に掲げられ、その前方に操舵席や砲撃席、走査席、通信席などが配置され、それらを一望できる中央奥の一段高い場所に艦長席が構えられていた。

「君たちの知る潜水艦や戦艦、飛行機の構造とは少し違うだろうか？ 僕らも始めは戸惑ったが、実際に使ってみると機械が目や耳の代わりをしてくれてね。ここでの制御と各部での整備監督者がいれば十分にこの艦の大きさでも操縦ができるようになっていっているらしい。実際、僕の仲間達は君たちの見た通り20人に満たない。その人数で操縦が出来るんだから大した技術だよ」

「俺達にそんな考証してどうする？ さっさと兄貴の目的を話せよ」
和昭が光昭を睨んで言った。彼はやれやれと肩を落とす。

「和昭にももう少しこの手の話に興味を持ってもらいたいものだけど……。まあ、いいだろう。僕の目的は、あの書置きの通りさ。この世界を蝕む病を治す。それが目的さ」

「だから、その病ってというのは何だ？」

和昭が怒りを露わにして食いかかる。しかし、部下達の銃を突きつけられて直ぐにそれを牽制される。

「いいさ。時間はもう少しかかるのだろうか？」

部下に銃を下ろさせると、光昭は幹部の一人と思しき男性に視線を向ける。彼は黙って頷く。

「というわけだ。少しの間おしゃべりをしよう。病というのは正しくその通りの意味さ。この世界、つまり地球は今、病に犯されている。君たちもその症状を肌で感じているはずだよ」

「何を言って……」

「気温の上昇や異常気候のことですか？」

「流石だね、成平君。そうさ、地球の気温上昇はこの病の代表的な症状のひとつだ。この症状で、近い将来、世界の国々がその国土を失うことになる。南極の氷が溶けてそれで海面の水位が上昇するからだ。でも、その時になつてしまつては遅い。それだけの環境の変化が起こつてしまえば、この世界のあらゆるものが死んでしまつたり失われてしまつたりするだろうからね。だから、僕はその病の原因を除去することにした。ここに集つた同志たちも同じさ」

「原因？ 除去？」

「不治の病も、その原因の根源を絶てば治せる可能性がある。それと同じさ。そして、この場合の患者はこの世界。そして、病の原因は、人さ」

光昭は静かに言った。

「兄貴！ まさか、人を絶滅させる気か？」

「そんな訳がないだろう？ 僕も人だ。流石に命は惜しいよ。僕の人言う人は、動物の一種であるヒトではない。鉄を打ち、機械を造り、莫大な燃料を消費する高い産業を持つこの文明の人のことさ」

「どう言つことだ？」

「君らも知つているだろう？ 今の世界を蝕んでいるのは、産業革命以降のこの文明であることを。だから、僕らはそれを一度無くそうと考えているんだ。言わば文明再生計画。それが僕らの目的だ」

光昭は微笑みを浮かべて言い切った。

「すっごい！ 西郷さんがいるわよ！」

賀集がゆきに家族への説得を頼んでから五日後、外出が許された菜々は大喜びで、上野恩賜公園の西郷隆盛像の前で歓喜を上げる。

「二十一世紀にはないのかい？」

「ううん。あるから嬉しいんじゃないの。殆ど100年近くも違う時間なのに、私も知っているものがこうして目の前にあるのよ！ これを感動せずにいられる？ 無理よ無理！ ああ、写メれないのが残念」

菜々は岩倉邸の敷地を出てからずっとこの調子である。根津神社や近くの高等学校や帝大の名前を目にすれば、見たことがあるのだの聞いたことがあるのだのと、絶え間なく話しかけてきた。まさに水を得た魚である。

「本当に、あなたの言うことを信じて良かったわ。あの子のあんな笑顔が見れたんですもの」

賀集一人の付き添いでは何かと心配という家族の意見から、同行することになったゆきが賀集の隣に立つと言った。その声は心底からの感謝が籠っていた。

「いいえ。こうして実現できたのは、ゆきさんの協力の賜物です。ありがとうございます」

賀集が軽く頭を下げて礼を言っていると、白いワンピースを着た菜々が駆け寄ってきた。

「ちよつと、二人でなに堅苦しくしているのよ。今日は、思いつ切りしまなきや！ 私の我が儘に付き合ってるとか考えちゃダメだからね。ゆき姉も、賀集さんも、行きたい所があったら遠慮なく行こうね！」

「ゆき姉？」

完全に素の女子高生中沢菜々に戻った彼女の呼称に、ゆきは驚く。「ダメかしら？ ゆきお姉さんとかお姉さまとか、堅苦しいのは家

の中で十分よ。だから、今日だけでもゆき姉と呼びたいな？」

「……ええ、いいわよ。じゃあ、私も今日だけは菜々と呼ぼうかしら？」

「無理しなくてもいいよ？ でも、そう呼んでくれたら嬉しい！」
恥ずかしさ半分で言うゆきに対して、菜々はとてもソフトな接し方をする。若干甲高くなっている彼女の声に少し周囲を歩く人は怪訝な顔をするが、特に気に留める様子もなく、そのまま自分の目的の方向へと歩いていった。

「では、菜々。これからどうする？」

「そうね。じゃあ、賀集さんが前に話していた活動写真を見てみたいわ」

ゆきが聞くと、菜々は即座に希望を言った。

「なら浅草の活動写真館に行こう」

「首領、装置の準備ができました」

まもなくして先の幹部が光昭に報告をした。彼は頷いた。

「さて、君たちに何故運がいいと言ったか、その意味をこれからお見せしよう。活目し給え！」

光昭は片手を振り上げ、前方の巨大画面を示した。画面に映像が映し出される。パソコンの画面と同じものが浮ぶ。これは巨大なパソコンの画面となっていたのだ。そして、その画面には次の瞬間、どこかの倉庫の映像が映し出された。

「これはこの艦内の格納庫だ。規模は小さいが、小型の偵察船が一つは入る広さを持っている。そして、今ここに格納されているのは、偵察船ではなく、仮想世界への行き来をさせる大型の送受口だ。通話口と受話口、その双方の機能を持つ最新鋭の装置だ」

映像に映る格納庫の真ん中に鎮座する巨大な機械を示して、光昭は言った。それは電話機の通話口や受話口に似た鼓笛状の形状をしていた。

その脇には、無数の小さな箱状の機械装置が山積みになっている。

山の大きさは大型送受口に匹敵するほどであるが、その一つはケイタイ程度の大きさだ。

「そして、この無数の小型装置こそ、文明再生計画の要。金属腐敗装置だ。この装置は、始動すると周囲にある金属を腐敗させ、最終的には己自身も腐敗され、地に帰る。これの用意に時間がかかった。しかし、今日、これらが必要な量まで完成した。つまり、計画実行のその日に、君たちは来たんだ。全く、運がいいよ。しかし、少し時間が早いとも言えた。折角僕が買ってきた祝賀の酒を皆で酌み交わす直前に君たちが現れたんだからね」

光昭は苦笑しつつ言った。どうやら彼のコンビニで購入したのは、酒であつたらしい。

「まあ良い。酒の入っているのはガラス製のビンだし、この艦は計画が達せられたのを確認し終わるまで装置の影響を受けない深海に潜むつもりだ。計画成功の祝いまで取っておくことにするさ。……

…嗚呼、勘違いをしないでくれ給え。この艦も計画成功を確認したら装置によって地に帰す。これが最後の文明とするつもりだ」

「一体、どうやってそんなことをするつもりだ？」

「和昭、これだけ丁寧に説明しているのに、まだわからないのかい？ やれやれ、では説明しよう。現在、世界中には無数の電話機やケイタイがある。そして、僕は装置をあの大型送受口を利用して装置をその世界中の受話口に一齐に送る。次の瞬間には、世界中で送られた装置が作動し、数分と経たぬ内にこの文明は失われる。残るのは石やガラスなどの一部の文明の遺産だけになり、人は再び動物の一種であるヒトに戻る。病というのは厄介だ。わずかでも残してしまえば、直ぐにそれが新たな病になる。だから、この大型送受口を使って、一挙に文明を消さなければならぬ。その為の装置であり、大型送受口であり、それを計画達成の瞬間まで残す為の飛行潜水艦なんだ」

「そんなこと……そんなことを、させるか！ 馬鹿兄貴！」

和昭は激情にかれられて叫ぶ。

しかし、光昭は涼しげな表情で、告げた。

「残念。計画は既に始まっている」

彼の言葉を裏付ける様に、艦がゆっくりと動き出した。

「花のパリかロンドンか。月が啼いたかホトトギス。夜な夜なあらず怪盗は、題してジゴマの物語。名探偵ポオリック死すとき、ニックアカアアの手をしつかと握り、『おん身、我に代わりて怪盗ジゴマをとらうべし』。これよりニックアカアアの活躍となりますが、追って詳しくことは、画面と共に詳細に説明致します」

活動写真館の前方にある画面の脇で、弁士がフランス映画のジゴマの前口上を、独特の抑揚をつけて語っていた。画面の前にあるボックスには、楽士達が楽器を構え、指揮者の動きに注目している。弁士が語り終わると、薄暗くともされていた館内の灯りが更に絞られ、オーブニングの音楽が奏でられた。

「ジゴマはそのあまりの人気と影響から、長く上映が禁止されていたんだけど、一昨年から解禁されて、時々こうして上映されているんだ」

隣で賀集が菜々に説明した。つまり、社会現象になるほどの人気映画のリバイバル上映なのかと菜々は、数年前に人気となっていた名前を書く人が死ぬ漫画を思い出しつつ、理解した。

不忍池の周りを歩く人々はその光景に目を見張った。

突如、池の水面が激しく泡立ったと思えば、続いて水柱が上がり、その中から盗まれたと報じられていた飛行潜水艦が現れたのだ。

突然の事に呆気にとられる人々が艦橋の巨大画面に映る。

「離陸成功。その他、問題ありません」

各処に着いた部下が報告をする。艦長席に立つ光昭が声を発する。

「よし、東京湾に向かえ！その後、太平洋の深海へ向かう」

彼の声に、部下達が了解と返事をする。

「この艦にはジェットエンジンが積まれている。直ぐに東京湾だ」

彼の言葉と共に、艦内に轟音が響く。ジェットエンジンの駆動音だ。

画面に映る景色は見る見る内に、東京上空を過ぎ、東京湾へ向かって進む。

「兄貴……」

「和昭、今なら操縦に集中している。監視するのは後ろにいる一人だけ。銃を構えているけど」

成平は小声で和昭に囁いた。確かに、今なら逃走の機会である。

「いや、一人なら銃が相手でも大丈夫だ。だけど、もう離陸しているんだ。今更どうするんだ？」

「格納庫へ行つて、装置を送るのを阻止する」

「可能か？」

「それは行つてみないとわからない。でも、やるしかない」

「わかった。……俺が動いたら、直ぐに格納庫へ向かえ。俺も直ぐに後を追う」

成平は返事の代わりに頷いた。

和昭は息を潜め、気配で監視者の様子を窺う。

そして、僅か一瞬だが、相手の警戒心が緩んだ。その瞬間を逃さず、和昭は動いた。

「がっ！」

和昭は地面を蹴り上げると同時に体を捻らせ、相手が銃の引き金を引く前にその顎を蹴り飛ばした。

「和昭！」

音に振り向いた光昭が名を叫ぶ。しかし、和昭は素早くその身を翻し、廊下へ出て、扉を閉める。慌てて部下が武器を持って扉に駆け寄る。

しかし、彼らが扉にたどり着く前に、鈍い音を立てて、扉は変形した。和昭が突進して重厚な金属の扉を変形させたのだ。これですばらく時間が稼げる。

和昭は前方を走る成平の後を追った。

「ああー面白かったあ！ コレだったら、現代でも普通に通用するのになあ……」

活動写真館を出た菜々が大きく伸びをしながら呟いた。

「発声映画が主流になれば、活弁の時代も終わるといふ意見はある。大衆の娯楽はいつだって新しいものに向くものなんだ。それは、君の時代も同じだろ？」

「それはそうだけど……。なんか勿体無いなあ」

賀集が言つと、菜々は口惜しそうに呟いた。

そんな菜々の様子を見て、賀集は話題を変える。

「さて、これからどうする？」

「あ、少し喉が渴いたわ。何か冷たくて酸っぱいものとかが飲みたいわね」

「中々注文が細かいね。まあ、この辺ならレモン水やラムネなんかも売っているだろうから、それでも飲んで休憩をしよう」

「うん」

「そうね」

ゆきと菜々が近くの公園の木陰の椅子を陣取っている内に、賀集はラムネとレモン水を買ってきた。

「はあー生き返る。どうも最近気だるさが抜けなくて。こういう飲み物を飲みたいのに、紅茶とかばかりなんだもん」

菜々がレモン水をカパツと一気飲みすると、賀集とゆきに愚痴る。

「そつえば、いつも西洋紅茶とかが多いな」

「仮にも貿易商の家なんだから、それくらい仕方ないでしょう？ うっ……失礼しました」

ゆきが苦笑混じりに言う。ちなみに、彼女はラムネを飲んでいたので、げっぷが出ている。

「しかし、九胤さんはラムネを用意していたな」

「ああ、お兄様は別よ。我が家は、商才に優れた家系で、お兄様もお姉様も父の事業の手伝いをしているけど、九胤お兄様だけは勉強

に優れていたから。あの離れも知っているでしょう?」

「はい。そちらでラムネをご馳走になりました」

「あの離れも、父と距離を置くためにお兄様が強行的に用意した場所なのよ。お互い優れた才能を持っていただけ、それ故に意見の食い違いも多かつたから。父としては、帝大進学をあつさりとした決定させたお兄様に期待をしていたみただけ、お兄様は理学や工学と云った商業とは関係のない分野へ没頭していったわ。多分、家族の中でお兄様と仲良く接していたのはなな子くらいだったわ」

「そうだったんだ……。でも、その割には九胤さん、私のところにあまり来てないわ。勿論、最初の頃は誰よりも様子を見に来ていたけど……。私になな子さんじゃないからかな?」

「……………」

菜々の意見に、賀集は妙な引つかかりを覚えた。その考えは菜々がなな子でないと確信を持っている菜々だから持てる考えだ。その証拠にゆきは毎晩菜々の様子を見に行っている。

「いいじゃない。お兄様にはお兄様の考えがあるはずよ。菜々、今度はどうする? まだもう一箇所くらいは行ける時間があるわ」

ゆきはラムネの残りを飲み終えると、菜々に言った。即座に菜々の表情が真剣なものになる。

「なら……………瑞江村に行ってみたい」

「え?」

「……………いいのかい? 他のところへ行くのとは訳が違う」

理由を知らないゆきがキョトンとする傍ら、賀集は真顔で確認する。

菜々は黙って頷いた。菜々にも賀集が案じている意味が理解できている。他の知っている場所を訪れるのではない。自分自身の居場所に行くのだ。しかし、そこに彼女の知っているものがある可能性は、既に発展を遂げつつある東京府内とは比にならない。辛い気持ちになることは十二分に予想できた。

しかし、それでも菜々は行くべきだと思った。

「行くわ。……例え、私の知らない景色でも、行って辛い気持ちになっても、私は行った事を後悔しない」

「……わかった。行こう。……ゆきさん、少し距離があるけど、付き合ってもらえますか？」

「いいわ。ただし、その途中で事情を説明してもらってからね」
ゆきが言うと、賀集は頷いた。

艦内は比較的単純な構造をしていた。お陰で、成平は迷わずに格納庫にたどり着けた。

扉を開け、中に成平は入った。

「おっと、動くな。勝手なことはしないでくれ。こいつを食らいたくはないだろう？」

銃口を成平に向けた男が言った。彼が装置を送る役割を担っている人物なのだろう。

成平は黙って肩の鞆を下ろし、手を上げた。

「よし、いい子だ」

「ごめん。こいつは違うみたいだ」

「え？……がはっ！」

成平が言った言葉を理解する前に、彼は扉諸共蹴り破ってきた和昭に吹き飛ばされた。床に倒れた彼は、既に気絶していた。

「ここの扉、立て付けが悪いな。簡単に壊れる」

「それはないと思うけど……」

「そんなことより、急いで装置を！」

和昭に促され、成平は頷き、周囲を見渡す。装置の数はあまりにも多い。これらを制御するのは、一つの操作で一括してできないに違いない。彼はそれを探していたのだ。

彼の目に一台のパソコンが目付いた。彼の持つものよりもかなり大きい。

「これだ！」

成平はパソコンを操作して、装置の作動を阻止しようとする。し

かし、制御画面を操作することはできたが、その使い方がわからない。下手をしてみれば、装置を作動させてしまふ。彼は手をこまねいた。

「そんなことをしているんだったら……、そこをどけ！」
「いつ！」

振り向いた成平は慌ててその場を離れた。和昭は拳を握り締めてパソコンに飛び掛った。

彼の拳は、パソコンを貫き、それは煙を上げて只の金属の塊になった。

「これでいいだろう？　そして、兄貴の教えを实践させてもらっぜ！」

彼は拳をパソコンから引き抜くと、ニヤリと笑い、床に転がっていた扉を掴む。体を翻し、その勢いで金属製の扉を装置の山に投げ飛ばした。破片となって吹き飛ぶ無数の装置。

「まだだ！」

和昭は叫ぶと同時に飛び上がり、装置を次々に踏みつける。それはまるで子供がはしゃいでいる様に見える。

「……………和昭には文明なんて最初からないな」

「へっへっへえ！　おい、これ結構楽しいぞ！」

無邪気に笑顔を向けて言う和昭に成平は溜め息をついた。

しかし、これで光昭達の文明再生計画は阻止された。

『和昭、成平君。よくも僕の計画を邪魔してくれたね』

格納庫に光昭の声が響く。

「何、言っているんだ。こんな計画、成功なんざしないのさ！　兄貴、馬鹿な考えはやめて俺と家に帰ろうぜ？」

和昭は装置を握り潰しながら言った。

『すまない。僕もここまでしてしまった。今更後には引けない。成功の保証はないが、実力行使に切り替えさせてもらっ。多少の犠牲も仕方がない。……………和昭、こんな愚かな兄貴を許してくれ』

それだけ言い残すと、光昭の声は消えた。和昭は装置を床に投げ

つけて怒りを露わにする。

「許せるわけがねえだろ！ 馬鹿兄貴！」

「和昭の言うとおりだ。実力行使と言うことは、この艦を使って、直接東京を攻撃するつもりだよ。そんなことをさせるわけにはいかない！」

「だけど、どうするんだ？ 幾ら俺でもこの艦を破壊するのは至難の業だぞ？」

「……だよな」

成平は落胆した。脱出と制圧はその手段が根本的に違う。和昭の力でも一人では限界がある。成平は周囲を見回した。

しかし、そこにあるのは瓦礫の山と化した装置と大型送受口、そして煙を上げるパソコンしかない。

「……いや、策はある！」

成平は大型送受口を見つめて言った。そして、床に置かれた鞆に駆け寄ると、勝ち誇った笑みを浮かべて和昭に言った。

「こんなこともあるのかと、持ってきている！」

瑞江村の後に都営新宿線一之江駅ができる周辺は、小松菜畑と住宅があるこれといって特徴のない景色であった。土ではあるが舗装された通りを歩く菜々達の横を、近くの川で魚釣りをした子ども達が古い桶に紐を通した簡易のバケツにフナを二匹ほど入れて走っていった。

「本当に長閑な田舎町って感じね」

菜々は素直な感想を述べた。近くにバスも走っており、交通自体は特別不自由な場所ではなかったが、特別栄えている様子もない。

「ま、それは21世紀でも同じか」

思わず考えていることを口にする菜々を、賀集は安堵しつつ眺める。

「随分安心した顔をしているわね？」

「ゆきさんもわかってるだろう？ 菜々君がここに来ることがどれ

ほど不安なことなのか」

「それは……。でも、私も同じよ。私も菜々と同じ様な気持ちだから」

「というところ？」

「ここへ来るまで私も恐かった。私の知る限り、あの子はここへ今まで来たことはなかった。もし、これであの子が確信を持ってこの今と未来で共通するものを示したら、私の中にあるなな子と菜々が同じ一人の人間だという希望が消えてしまう。これでよかったのよ。あの子はあの子で納得して、私はこれまで通りにいられる」

ゆきは穏やかな表情で語った。

一方、菜々は通りかかる住人に地名や番地を尋ねながら、少しずつ場所の特定を進めていく。

「……ありがとうございます！ 賀集さん、ゆき姉！ 場所がわかったわ、こつちよ！」

菜々は小松菜畑の手入れをしていた農夫に礼を言うと、二人を呼ぶ。二人は小走りで進む菜々の後を追った。商店が幾つか並ぶ道を通り過ぎ、少し広い通りを渡り、拓けた畑の前で立ち止まった。畑には、小松菜以外にも瓜や大根など様々野菜が植えられている。

「ここよ」

二人が追いつくと、菜々は一言だけ呟いた。

そして、そのまま一歩ずつ畑の中に入っていき、畑の真ん中で立ち止まった。

「ここに、将来私が住むアパートが立つのね」

畑を見渡して、菜々は静かに言った。通り慣れた路地もない。ただ広い畑がそこにあるだけの景色であったが、彼女には確かにそこに、遠い未来に自分が暮らす景色が見えていた。

「菜々……」

「今は、そつとしておいてあげよう。今の菜々君の気持ちを共有することは自分達にはできない」

「そつね。こつして見守ることしか……！」

ゆきが賀集の意見に同意していたとき、それはなんの前触れもなく訪れた。

彼らの目の前で、立て付けの悪い看板が風に倒れる様に、菜々はパタリと焔に倒れた。

慌てて二人は菜々のもとへ走る。

「菜々君！ ……え？」

倒れた菜々の体を抱き起こした賀集は、彼女の白いワンピースのスカートが赤く血に染まっていることに気がついた。

「！ どいて！ 私が診るわ！」

直ぐに事態を察したゆきが菜々の体を賀集から預かり、彼女の下腹部を確認する。

「賀集さん！ 直ぐに人を呼んで！ 病院へ！」

ゆきは赤黒く染まった指を賀集に向けて、切迫した様子で声を張り上げた。

漆

「菜々君は？」

病院の診察室からゆきと連絡を受けて駆けつけてきた九胤が出てきた。賀集と九胤に付き添ってきた例の執事の老人が二人に近付くと、彼らは沈んだ表情のまま首を振った。

「もう、一週間もたないだろうという話だ。次に倒れたら、その時が山だろつとも」

九胤は搾り出すような声で言った。

「賀集さん、私、どうすれば……………」

ゆきは賀集の胸にしがみ付くと、そのまま顔をうずめてすすり泣き始めた。

正直、賀集にもどうすればいいのか皆目見当がつかなかった。

「それから…………賀集君に確認しておかねば成らないことがある」

「え？」

「なな子だが、意識を失った際に流産していたそうだ。…………その父親は君かい？」

「！ 違います！」

賀集は即座に否定した。当然、賀集は菜々と肌を合わせたこともない。

「君の言葉を信じよう。今のは確認だ。…………それに、胎児は六週目から七週目前後だったそうだ」

九胤は頷くと言った。それを聞いた賀集は、菜々がなな子であった時の子であると理解した。

「菜々…………彼女にその当時恋人は？」

「いない。我々には、なな子の体の事は愚か、あの胎児の父親すらわからない」

九胤は悔しそうに言った。しかし、その目はそれが嘘をついていることを語っていた。

「胎児については……後で検討しましょう。それで、菜々君の意識は？」

「それは、しばらくすれば回復するそうだ。病が根本的な原因だが、今回の直接的な原因はむしろ流産の方にあるらしい」

「そうですか」

賀集はそれ以降、黙って泣き続けるゆきの背中をさすっていた。

「……賀集君、爺、すまないがここを頼む」

ゆきがやっと落ち着き始めたことを確認すると、九胤は賀集と執事に言った。

「え？」

予想外の九胤の言動に驚く賀集の肩を彼は静かに叩いた。

「察してくれ。僕も辛いんだ。……しかし、ここで待つだけの強さもないし、その弱さを妹達に晒したくもない。……また後でこちらへ連絡する。すまない」

「……わかりました」

そのまま九胤はふらついた足取りで、病院を後にした。

東京上空に現れた戦闘飛行潜水艦龍凰は、人々が何事かと見上げ中、その猛威を振るおうと龍の口を開き、砲台を出した。

しかし、その火が吹く前に、龍凰の尾から火が上がった。飛び散った残骸が地上に落ちる。

人々が恐る恐るその行く末を見守る中、煙の中から黒い影が飛び出してきた。

背の高い建物の屋上に着地したその巨大な黒い影は、鳴き声を轟かせた。

「にゃあああああああ！」

その影の姿は、猫そのものであった。しかし、その体は体毛の代わりに黒鉄の金属で覆われていた。

そして、その背中には、二人の人影があった。

「まさか、巨大猫型ロボットを出すなんて」

「ふふ、こんなこともあるうかと、僕のパソコンの助手猫はインターネットの仮想世界では巨大猫型ロボットとなる様に作っていたんだ。普通の受話口ではとても実体化できる大きさではないけど、あの大型送受口なら可能だった」

猫型ロボットの背中にいる成平は和昭に今行ったことを説明した。

「まさに竜虎の対決だな」

龍凰を見上げて和昭は言った。

しかし、成平は首を振った。

「いいや、竜猫の対決だよ」

「温かいお茶だ。飲めば、多少は落ち着く」

賀集は看護婦に頼んで用意してもらった煎茶を、菜々の眠るベッドの横にある椅子に腰掛けるゆきに渡した。

「ありがとう。……ごめんなさいね。賀集さんも辛いのに」

「いいや。所詮自分は部外者だ。家族の君とは立場が違う」

しかし、ゆきは首を振った。

「ううん。賀集さんは部外者じゃないわ」

「それは君だから言えることさ。周囲から見たら、自分は両家の娘に媚を売る只の書生もどきだ」

「いいえ。違うわ」

「え？」

賀集は首を傾げた。ゆきは少し躊躇しつつも、ほんのりと頬を染めて言った。

「あなたはまもなく私の正式な婚約者となるの。だから、あなたの行動は義理の妹の為に奮闘する好青年。それが周囲の目よ」

「そ、それは……」

冗談や嘘ではないことは、ゆきの目を見た賀集が十分に理解できていた。しかし、その意味がわからない。そもそも、賀集が菜々やゆきと出会ってから、まだ二週間程度しか日が経っていない。

「話したでしょう？ あなたの存在を父が快く思っていないと。だ

から、あなたを私の婚約者としてしまい、この子との面会に正当な理由を作ってしまう。あなたの耳に入らなかったのは、あなたがそれを拒絶すると考えたから。あなたの御祖母様もそれを望んだ。これは一種の政略結婚。出会ってからの時間なんて関係がないのよ」「……確かに、京橋の祖母ならお家再興の為なら、鬼とも悪魔とも平気で契りを握るだろうな。しかし、他の人は？」

「正直言つて、あなたとこの子以外、全員承知よ。それに、この子がもう長くはないのも、承知の上だった。だから、皆としてはあなた達二人に束の間の夢を見せて上げたかったみたいよ」

ゆきはとても淡々と語った。賀集は憤りに拳を一度は握るもの、ぐっとそれを堪えて掌を広げた。

「ゆきさん。……なんで今、それを話したんですか？ 話さないでやり過ぎすこともできたのに」

「……………だからよ」
「え？」

賀集に聞き取れないほどに小さい声でゆきは言った。聞き返した賀集に、彼女は顔を上げてもう一度言った。

「好きになっちゃったからよ、賀集さんのことが
その瞳に、嘘はなかった。

「だから、あなたには後悔をしてほしくなかった。あなたの人生は、あなたの手で選んで欲しかった。……駄目かしら？」

「……………」
賀集は黙って唇を噛んだ。その様子を見て、ゆきは薄っすらと涙を浮かべた。

「ゆきさん、今晚はここに泊まっていくのですか？」

賀集はやっとの思いで口を開いた。

「ええそのつもり」

「なら、菜々君を、後を頼みます」

「！ あなたも逃げるの？」

病室から出ようとする賀集にゆきは問いかける。

賀集は振り返らずに答えた。

「いいえ。自分には、やらなければならないことがあるので」

「え？」

「菜々君と書いている小説を、空想未来小説を書き上げます」

そして、そのまま賀集は病院を後にし、まっすぐ岩倉邸へ行くと、菜々の部屋へ入れて貰える様に土下座し、何とか入れてもらおうと、彼は原稿用紙を広げた。

正直なところ、時間はあまりにも短かった。細かい文章の推敲をする余裕もない。綴られる物語は彼の心境に、あまりにも忠実で、不安定な稚拙なものとしてその像を現していく。しかし、彼は書くこと決して諦めなかった。

彼に必要なことは、この部屋でこの小説を書き上げる事だけだった。

「行くよ！ 猫！」

「にゃああああああ！」

成平の声に猫型ロボットは咆哮して応え、建物から飛び上がった。猫は空中をかけて、龍凰に迫る。

龍凰も猫に爆雷攻撃を仕掛ける。しかし、その爆発の間を縫うように進み、猫は鋭い爪を立てて龍凰の装甲をひっかく。火花と爆発が起こる。

地面に落下する猫。だが、猫捻りをしてしなやかに大通りに着地し、再び猫は空中に飛び上がる。

しかし、龍凰は素早く轉身し、頭部の主砲を猫に向けた。

「！」

刹那、主砲は火を吹き、猫は吹き飛ぶ。黒煙をその軌跡に残し、落下する猫。

「にゃああああああ！」

しかし、その煙幕を利用し、再び猫は飛び上がり、龍凰の頭部に飛び掛った。だが、龍凰の主砲はその機会を逃さず、再度主砲が火

を吹く。今度は零距离の直撃を受ける猫。

猫の残骸が地上に降り注ぐ。

黒煙が風に流れる。

人々はその光景を、固唾を吞んで見守る。

黒煙が晴れた。そこには、下半身を失いつつも、龍凰の頭部にしがみつく猫の上半身の姿があった。

地上の人々が歓声を上げる。

「にゃあああああ！」

猫は懇親の力を振り絞り、龍凰の頭部に両前足の爪を立てる。頭部の装甲が軋み、唸りを上げる。

しかし、猫の胸は再び主砲の目の前に下がる。今度直撃を受ければ猫が大破することは誰の目にも明らかであった。だが、猫はそれを諸共せず、頭部に爪を立て続ける。装甲にひびが広がる。主砲から音もれる。再び火を吹く。それを人々は悟った。

しかし、主砲は発射されない。その砲口が先の零距离射撃で変形しているのだ。猫はこの機会を逃さず、最期の力を両前足に注ぎこむ。両前足の、両肩の装甲が砕ける。圧力に耐え切れず、猫の頭部の装甲も砕け、素体が露わになり、赤い瞳だけが粉塵舞う空中に光る。

「にゃあああああ！」

猫の最期の雄叫びが東京の空に轟いた。

刹那、猫の両前足は龍凰の頭部を砕き、その爪は主砲に装填された砲弾に達した。龍凰の頭部と猫は、東京の空に閃光と黒煙を描き、爆発四散した。

龍凰は操縦不能になり、そのまま煙を上げながら上野公園へ墜落した。

咳込みながら逃げ出す者達の姿を見送り、光昭は炎の広がる艦橋から格納庫へと歩いていく。

とても静かだった。爆発音、熱に呻き声を上げる鉄やガラスの音、

熱風の轟音も今の彼にはとても小さく聞こえていた。

光昭は、床に落ちている装置の残骸の中から、無事なものをつ、手に取り呟く。

「……まだ、終わらせる訳にはいかない」

「やめる！」

「！」

驚いて振り返ると、そこには和昭と成平の姿があった。

「君たち……なぜ？」

「猫が龍凰をひっかいた時、あの時に僕たちは龍凰に飛び移ったんです」

成平が答えた。

「なぜいるんだ！　ここは、危険だろう？」

「馬鹿兄貴！　それは兄貴も同じだろうが」

和昭が睨みつける。その顔は煤で黒くなっている。

「僕は……もうこうするしか方法はないんだ。たった一つでもかまわない。この世界から、一つでも病の根源が消えればそれでいい」

光昭は切ない面持ちで言うと、大型送受口に歩いていく。

「兄貴！」

「……！」

和昭は光昭を殴り飛ばした。床に転がる光昭。それを、拳を構えたまま、涙を流して見つめる和昭。

「……もう、終わりにしよう？　俺は、やっぱり兄貴が間違っていると思う。帰ろうぜ？」

「……すまない。和昭、母や父には、僕を生んでくれてありがとうと伝えてくれ。僕は、こんなことをしてしまった。今更、帰れはない。……だから、せめて目的をほんの少しだけでも、果たして死なせてくれよ」

「兄貴……」

和昭は、何も出来ず拳を下ろした。

光昭はゆっくりと立ち上がり、床に転がった装置を拾う。

「さようなら」

光昭は一言、和昭に告げると、装置を大型送受口の上に掲げた。

「終わりではありません！」

「！」

光昭は声を上げた成平を見た。彼は言葉を続けた。

「まだ、光昭さんの戦いは終わりではありません。人は確かに愚かで、この世界を滅ぼす病かもしれない。でも、人だって、文明だって、いつまでも滅ぶ道を進み続けるわけではない。僕はこの文明が好きです。だから、断言できる。絶対に、この世界を滅ぼしはしない。蝕むのが文明なら、それを治すのも、また文明です。それは、光昭さん自身がやろうとしていたことでもあります」

「成平君……」

光昭は自分の手に持つ装置を見る。

「光昭さん、あなたは立派です。他の誰よりも早く気がつき、そして行動に移した。でも、その方法は最善のもでなかった。ただそれだけです。……もう少し、もう少しだけ、時間を僕達にください。次第に、皆気がつきます。立ち上がります。そして、少しずつ世界は変わります。だから、僕達と一緒に、いきましよう！」

成平の訴えに、光昭は嘆息し、装置を持つ手を下ろした。

「やれやれ。僕も、まだまだ甘いな。……でも、できるという保証は？」

「ありません。でも、信じているというこの気持ち。その気持ちとというのが、一番の保証です。気持ちがある限り、可能性もあります」「希望的な意見だね。……でも、僕もその希望、信じてみたいと今は思っているんだよ。困ったことに」

光昭は苦笑する。

「では、一緒に……」

「ごめんね。それはできない。この世界で人を変えるのは、君たちの役目だ。罪人の僕がすることではない。……でも、僕も信じるよ。だから、こっちの世界で、世界の変化を見守るよ」

「！」「！」

光昭は笑顔を浮かべて、その身を大型送受口に投げた。同時に、彼は空中に作動させた装置を放り投げた。彼の体が大型送受口の中に消えた直後、装置の力で大型送受口や格納庫が腐食し、溶けていく。

「光昭さん！」

「馬鹿、ここはもうもたない！ 今はまず逃げるぞ！」

そう言い成平の手を引く和昭の瞳には光るものが見えた。

まもなく、龍鳳はその残骸を殆ど残すことなく腐食し、地に帰った。

数日後、和昭と成平はそれぞれ高校に登校した。全てが溶けてしまい、光昭の仲間もその身を隠してしまい、結局警察は事件の全容解明にはいたっていない。成平と和昭も偶然上野公園に居合わせた被害者ということでも口裏を合わせた。

しかし、復帰した彼らに対しての学友達の態度は余所余所しいものであった。恐らく接し方がわからなかったのだろう。

昼の休み時間、二人は校舎裏で握り飯を食べていた。

「結局、どうやって変えていけばいいんだろうな？」

梅の入った握り飯を食べながら和昭がおもむろに言った。

「さあね。わからないよ。……一つ言えることは、簡単なことではないということだね」

「おい！」

「でも、不可能なことではないはずだ。それだけは言える。だから、今は勉強をするしかないんだ」

昆布の入った握り飯を食べる成平が答えた。

そんな時、彼のケイタイが手紙を受け取った。届いた手紙を成平は広げる。その文面を見て、目を見開いた。

「おい、和昭！」

「どうした？ ……これは！」

手紙を覗きこんだ和昭も目を見開く。手紙の差出人の名前は、光昭になっていたので。

手紙には短い文章が書かれていた。

『君たちならできる。僕は、こつちの世界から世界を少しずつ変わる様に導いていく。だから、君たちは未来を信じて、頑張れ』

東京は、今日も暑かった。

「出来た……」

賀集が万年筆を置いたのは、日が一度昇り、それも傾き始めた翌日の午後であった。

「……おっと」

大きく伸びをして立ち上がった賀集は思わずふらつきベッドに倒れこむ。寝食すら忘れて書き続けていたのだ。当然の結果と言える。「いや、駄目だ。今すぐに菜々君のところへこれを届けに……行かねば……」

しかし、賀集はそのまま死んだ様に一気に眠りに落ちた。

五分。ほんの五分程度眠ったつもりであった。

賀集は、ゆっくりと瞼を開く。疲労は回復していた。

「……しまった！」

しばらく辺りを見回すと、その異変に気がついた。部屋が薄暗くなっていた。

慌てて窓の外を見ると、日はもはや夕日とも呼べないほどにまで沈んで弱くなり、青くなつた空の反対側は漆黒の闇の中に浮ぶ白い月が街を照らしていた。

五分どころか、五時間近く眠っていたらしい。

慌てて賀集は原稿を束ねて鞆に入れると、大急ぎで部屋を出た。

そして、いつの間にか岩倉邸に戻っていた例の執事に、菜々のいる病院へ電話をかけさせてもらうように頼んだ。

「……ええ？ どういう事ですか？ ……それじゃ誘拐じゃないですか！ ……はい。わかりました。では、警察に連絡をしてください！」

賀集は殴りつける様に、電話機の受話器を戻した。穏やかな事態でないことを察した執事が賀集の様子を伺う。

賀集は、一度深呼吸をして憤りを抑えると、口調を落ち着かせて

説明した。

「菜々君が病院から姿を消しました。看病をしていたゆきさんの姿も見えないそうです。それから午後の回診の後に二人組の男が見舞いに来たそうです」

「ええ！ そんな！」

驚く執事に、賀集は続ける。

「看護婦の一人がその二人組の内の一人が彼女の身内の者だと知っていたので、それから病室の様子も見にいかなかったそうです。……つまり、昨日病院にいた、九胤さんです」

「！ ……しかし、なぜお坊ちやまが？」

更にその小柄な体を仰け反らせて驚く執事。賀集は首を振り、答える。

「それは自分にもわかりません。しかし、菜々君とゆきさんが九胤さんに攫われたのは状況から間違いありません。問題は、どこにいて、誰といるかです！ 心当たりはありませんか？」

「そんな……なんて事を……」

執事は完全に狼狽している。賀集は、思わず舌打ちをすると、彼の両肩を掴んだ。

「落ち着いて下さい！ あなただけが頼りなんです！」

賀集が叱咤すると、執事の視線が賀集と合った。過呼吸気味になつていた彼の呼吸が落ち着く。

「………どうか、落ち着いて思い出してください。九胤さんが親しくしていた人や、何かを隠れてする様な場所を」

「………そういえば、心当たりがございます」

「それは？」

「ここ半年………いえ、一年程の間、九胤お坊ちやまが一緒にいるのを何度か見ました」

「それは？」

執事に問うと、彼はじつと賀集の目を見つめた。

「！」

賀集にも頭の片隅に可能性でその人物のことがあった。しかし、自らでそれを指摘する勇氣はなかった。

しかし、執事はその人物の名を言った。

「賀集様をこちらに連れて参りました、大正明治と申す一高生でございます」

その言葉を聞いた賀集の脳裏に、遠い昔に大正が言った言葉が、君は俺にいつか裏切られる、という言葉が発した少年だった大正の姿が浮んでいた。

賀集は夜の本郷通りを、帝国大学目指して一目散に走っていた。直ぐ後を走っていたはずの執事の姿は、既に遙に後方に小さく見える。

あれから彼らは、まず九胤の住む離れを調べた。しかし、何も参考になりそうなものはなかった。

しかし、何も参考になりそうなものがなさ過ぎたのだ。そこで、賀集は執事に聞いたのだ。

「九胤さんが、学問をするのに利用していたのはどこですか？」

離れにあった書物は、一般的な読み物や総合的な勉学の学習書などばかりであった。帝大で専門的な学問を学んでいる人間の部屋にしては、あまりにも専門書がなさ過ぎたのだ。

そして、執事が思い出した場所こそ、帝大内の一棟の地下室を教授が自由使用を特別に認められているという話だ。当然、公にはなっていない非公式な使用らしいが、それこそが彼らの居所である可能性を強めた。

「はあ、はあ……流石に、走るには距離があるな」

九胤の学んでいる分野の研究室が入っている棟までたどり着いた賀集は、苦しくなった呼吸を整えようと深呼吸をする。

しかし、そう中々呼吸が落ち着くほどに賀集は運動慣れしてはいない。全身から流れ出る汗の内、顔を伝う汗だけでも腕で拭くと、彼はふらつく足取りで棟の中へと入った。

夜の棟内の灯りは想像以上に少なかった。地下へ降りる階段は特に暗く、一段一段慎重に降りる。

しかし、それ以上に彼が恐れたのは、足音であった。この階段は、構造上か、異常なまでに足音が上から下に響く。足音だけではない。賀集の荒くなつたままの呼吸も、その息遣い一つ一つが階段から棟の全体に響きわたる。しかし、それを気にしてばかりはいられない。やがて賀集は、階段を下り終え、地下階の廊下に出た。しかし、廊下に聞こえるのは賀集の息遣いだけだった。

「違ったか……」

そう呟いた時、賀集の目に薄暗い廊下の中で僅かにもれる部屋の明かりを見つけた。正しくは、分厚いガラス越しにもれる灯りだった。

その部屋は、防音設備が整っているのか、金属製の分厚い扉で閉ざされていた。

賀集は、その扉に耳を押し当てた。とても微かだが、話し声が聞こえる。

「……とうに、なな子の……だな？」

「……ていだ。今度こそ……は成功する」

はつきりと聞こえなかったが、男の声がなな子の名前を言ったことと、もう一人の声が聞き間違えることのないほどに聞きなれた声であったこともわかった。もう一人は、間違いなく大正の声であった。

賀集は周囲を見回した。何かの実験に使うものらしき金属製の棒があった。１メートルを超える長さのそれを掴む。想像以上に重い。賀集は、金属の棒を握りしめると、金属製の分厚い扉を思いつ切りの力で開け放った。

「……」

部屋は、ほぼ正方形の四方の壁をコンクリートで覆われた完全な密室部屋となっていた。そして、部屋の中央には大きな機械装置が

あり、その傍らには頭に何か冠の様な装置が取り付けられた菜々とゆきが横になつて眠っており、その前に九胤と大正の姿があつた。「予想以上に早い到着だな。流石は賀集だ」

最初は驚いた大正だったが、直ぐに平静な態度になり、笑みを浮かべて言った。

「どういうことだ?」

一方、九胤は動揺したまま、大正に聞いた。

「どうもこうもない。俺達は病院で看護婦に顔を見られている。そして、君はその正体を知られている。賀集が突き止められない方が不思議なくらいだ。だが、正直なところ、もう少し時間がかかると踏んでいた」

淡々とした口調で語る大正の目に一切の偽りはない。

「やはり、お前が菜々君達を……。何のためにこんなことを?」

「実的確な質問だ。再実験を行う為だ」

「再実験?」

「実験に失敗はつきものだ。しかし、それで飽きられては、科学の発展はない……。失敗は成功の母というだろ?」

「何が言いたい?」

賀集は声を落として聞いた。大正はやれやれと首を振る。

「おいおい。君ほどの人間がこの状況で俺の言葉の意味がわからないというのかい?」

「………ななさんは、自殺じゃないのか?」

「それでいい」

「答える!」

賀集が声を荒げると、大正は肩を竦めて答えた。

「肯定だ。……しかし、否とも言える。彼女は確かに自殺未遂をした。だが、それは失敗に終わった。なぜなら、ここにいる岩倉氏が助けたからだ」

「……………」

賀集は何も言わずに大正の目を見つめ続ける。全て偽りのない言

葉だ。

「そして、彼は俺を呼んだ。理由はこの装置を使う為」

「何の装置なんだ？」

「説明する単語はいくらでもある。だが、どれも的確ではない。偽りのない言い方をすれば、人の精神を移す装置だ。もっとも、あの段階ではまだ完成に至ってはいなかった。しかし、既に試作段階を終え、数回の動物実験も終えていた。そこに来た岩倉氏の要望は、渡りに船だった。だから、実験に協力した」

「つまり、その装置は九胤さんが研究をして作ったものではなく」

「ああ、俺が彼の協力で作ったものだ」

大正は平然たる顔つきで言った。

「……君は何者なんだ？」

「それは今、君がするべき質問とは言えない」

「……二人をどうするつもりだ？」

「一応合格点だな。いいだろう。二人は実験の被験者だ。彼女の精神をこの女性に移す」

大正は菜々を指差した後、その指をゆきに向けた。

「そんなこと……」

「出来ないとは言っな？ 既に成功はしなかったが、失敗という程ではない成果を出している」

「その実験で、菜々は彼女の体に憑依つたのか？」

「肯定だ。もっとも、あの時は岩倉なな子から岩倉ゆきへ憑依す実験であった為、薬で眠らせて運んできた岩倉ゆきの脳波に変化が見られなかった為、失敗したと考えた。だから結局、俺達は岩倉ゆきを元のベッドに戻し、岩倉なな子も元の入水自殺をした池に捨てたがね」

「！」

「怒ったかい？ しかし、この展開は君が随分前にわかっていたことじゃないか？ 俺が君の能力を知った時に、俺はこうなる事を予想して君に告げた。覚えているだろ？ 君は俺にいつか裏切られる」

賀集は怒りをぐつと、金属の棒を握り締める力に込めて耐える。

「……教える。自殺の、なな子さんの自殺の理由は、何だ？」

「もう想像できるだけの材料は得ているだろ？　いいや、君の事だ。自分の口からそれを言うことはできないか」

大正は軽笑すると、蔑んだ表情のまま続けた。

「この岩倉氏が、例の胎児の父親だ。加えて言うと、それは岩倉なな子を望まずして起こった。……これで十分だろ？」

「……下衆」

賀集が呟いた。

「外道とも言える。だが、そのお陰で俺は貴重なデータを得られた」

その瞬間に、賀集の中で何かが切れた。その手に握る金属の棒を振るい上げ、声にならない奇声を上げて、大正に襲い掛かった。

しかし、重い金属の棒は動きを鈍らせ、大正は体を捻って、それを回避する。棒は鈍い音を立てて床を叩く。

「そこまでだ！」

賀集が大正の声で振り向くと、彼の前には拳銃を構えた九胤が立っていた。

「ご苦労。助かった」

「いいえ。それよりも、約束を」

「わかっているさ。ちゃんと岩倉ゆきの体に岩倉なな子の精神を入れてやる」

拳銃を構えたままの九胤の肩をポンと叩き、大正は言った。その目は偽りを言っていた。

「……」

「だが、その前にコイツを片付けなければ。賀集、その物騒な棒をこつちによこせ。安心しろ、直ぐに殺しはしない。むしろ逃がしてやる。そうすれば、必然的に、精神を失って死亡するこの岩倉なな子の体に都合のいい説明がつくからな！　喜べ、21世紀まで生きられるぞ！　もっとも、殺人犯としての指名手配を逃れ続けられた

らの話だがな！」

そして、大正は愉快そうに呵呵大笑する。

拳銃を突きつけられた時点で、賀集に勝機はなかった。しかし、負けない可能性は残されていた。

彼は、ゆっくりと体を向き直り、その手に握る金属の棒を思いつ切り放り投げた。部屋の中央に鎮座する機械装置に向かって！

「！」

「ちっ！」

驚く九胤。咄嗟に大正は、舌打ちをすると同時に、目の前にいた九胤の体を思いつ切り突き飛ばした。突き飛ばされた九胤の背中に、賀集の投げた金属の棒が直撃した。

「がはっ！」

呻き声を上げて、九胤は倒れる。同時に、拳銃が部屋の隅に転がり、金属の棒も鈍い音を立てて床に落ちる。

すぐさま大正は、装置に駆け寄る。

しかし、賀集の動きはそれよりも数瞬早かった。彼は地面に落ち、弾みにで宙に浮いた金属の棒を走りこみながら、掴み取り、その走る勢いを殺さずに、そのまま装置を殴った。

機械装置は、火花を散らした。しかし、それも一瞬だった。機械装置は再び沈黙し、その上は拉^ひげて、そこに金属の棒が突き刺さっていた。

「くっ……」

火事場の力で殴った為、肩を痛めたらしく、賀集は顔を歪める。しかし、その両脇にいる菜々とゆきは、静かに寝息を立てていた。二人は、無事だった。

「……ちっ！ 無茶苦茶しやがって！ 陳腐な人間風情が……」

賀集が顔を部屋の入口に向けると、毒突く大正がいた。

「待て！」

賀集は直ぐに立ち上がり、走った。同時に、大正も走り出した。

大正は、階段を慣れた調子で駆け上がる。一方、賀集は暗い階段を上手く駆け上がれない。その距離は一気に広がる。

そして、あっという間に地上階へ上った大正は、そのまま外へ逃げようとする。

「あ！ 待ちなさい！」

しかし、丁度そこには賀集の後から走ってきていた執事がいた。

彼は直ぐに両手を広げる。

「ちっ！」

大正は、突き飛ばそうとするが、すぐに迫る賀集の足音に気づき、舌打ちをすると、その身を翻し、階段を駆け上がった。

「賀集様！ 上です！」

やっと夜目が効いてきた賀集が、地上階に達すると、執事が上を指差す。階段を駆け上がる音はまだ響いている。

そのまま賀集は階段を駆け上がった。階段を駆け上がる音を追っていくと、屋上に達した。見ると、屋上への扉は、開け放たれている。

「はあ、はあ……。よし！」

賀集は肩で息をしつつも、呼吸を整え、屋上に出た。

夜風が彼の体を通り過ぎる。屋上を照らすのは、空に浮ぶ月の明かりだけだ。

そして、その月光の下、屋上の真ん中に夕涼みでもしているかのように立つ大正の姿があった。

「脱帽だよ、賀集」

大正は視線を賀集に向けた。

「大正、君は……」

一体何者なのか。そう聞こうとする言葉を飲み込み、賀集は違う言い方を選んだ。

「大正、自分の目を見て言え。君は、未来から来たのか？」

「……………」

じっと大正を見つめて言った賀集を彼は黙って視線を合わせ続け

る。しかし、大正は直ぐに溜め息を吐き、この睨めっこをやめた。

「降参だ。……賀集、君の言うとおりだ。本来の俺はこの時代の人間ではない。中沢菜々の21世紀どころではない、途方も無い未来に生きていた人間だ。この大正明治という名前も当然本当の名前ではない。第一次世界大戦……ああすまない、お前からすると只の世界大戦だな。あの戦争で家族が死亡したという、大正という苗字の孤児に憑依つったから、ちよつとした遊び心でな。行き着いた宇都宮の親族だという者に大正明治と名乗った。明治維新で氏名ができたとはいえ、まだ戸籍もいかげんだな。簡単にこの時代の人間に入り込めた。そして、中学校でお前に出会った」

賀集は大正の目を見つめる。彼は本当の事を言っている。

「……本当の君も同じ年なのか？」

「ああ。時代だけじゃなく、人間そのものが少し違う時代に生まれただ。分かりやすく言えば、秀才や天才を意図的に作れる技術がある。よって、俺の時代の人間は生まれながらの秀才や天才しかない。そして、俺もその例に漏れることなく、5歳でこの時代でいう帝大卒業以上の知識と学力を習得し、7歳で重力子物理学の応用理論を完成させた。それ以降、俺はある目的の為に不可逆的な存在とされる時空の可逆性を実証……つまり、過去への時間移動を実現させよう研究に没頭した」

「それを完成させてこの時代に来たのか……」

「正確には、百年は先に行くつもりだった。どうも装置が未完成だったらしい」

「君の目的は何なんだ？」

「勿論、俺は研究者だ。知的好奇心が理由だ」

「理由ではない。君が過去へ来た目的だ」

「……流石だな、俺が見込んだだけある。地球人になりたかったからだ」

「え？」

「恐らく、中沢菜々からその前兆についての話は聞いているはずだ」

「まさか、空想未来小説の……環境問題のことか？」

「肯定だ。彼女の話は所詮、地球の周期的な環境変動に多少の変化を与えていた程度の段階だ。この星の許容範囲内の事態で、異常気象と騒いでいた甘い時代の、な」

「……………」

「俺の時代、地球に脊椎動物は存在していない。環境適応能力の高い無脊椎動物の一部と植物の一部が異常変異して生存している以外は肉眼に見える生物は全て絶滅した。代わりに肉眼に見えない大きな微生物には楽園と成っているが」

「人は？」

「俺達人間は、地球外に逃げた。多くは地球衛星軌道上の人工生活衛星で生活し、一部は新天地を求めて宇宙へ旅立った。俺は宇宙で生まれ育った」

「そんな……………」

「お前の能力には、感謝すべきだな。この話を信じてくれるのだから」

大正は驚く賀集を見て口元を綻ばせた。そして、大正は話を続ける。

「そして、俺は完成させた装置を持って、地球へ降りた。しかし、俺は予定していた時代よりも若干早い時代に来てしまった。正直、最初は困った。理由は二つある。この時代ではまだ環境の変化に注目する人間はごく一部の研究者だけだった。そして、もう一つは技術面だ。俺は研究者だ。実験の結果を確認する必要があった。故に、俺の時代に再度戻る必要があった。しかし、この時代ではその装置を作るには、いくつかの材料が未発見であったり、未開発であった。仕方なく、俺はこの時代の人間として生き、この時代のこの国でも優秀な人間が集まる場所へ行くことにした」

「一高に帝大か」

「肯定だ。そして、岩倉氏と出合った。彼は愛する妹を生かす為にその精神を別の人間に移したいと望んでいた。俺はそれを利用した。

同時間での憑依を成功させることと、別時間での憑依は理論上同じことだったからな」

「え？」

「時間を直線と考えてみる。ある点とある点の二つでそれぞれ切断するとして、その一方で見ると未来でも、未来から見ればもう一方は過去だ。すなわち過去と未来を移動することは同一の意味になり、可逆的だ。同時間と言ったが、これは始点終点が高点になっていて状態に過ぎない。二次方程式の重解と同じだ。しかし、どうやら俺が目的の時間に来れなかったことと同様に、この時間移動には俺の想定していない別の因子があるらしい。結果的に、岩倉なな子に2010年の中沢菜々の精神が憑依してしまった」

「菜々君は、戻れるのか？」

「それはわからない。しかし、不可能という可能性がある」

「どういうことだ？」

「実体の無い精神であっても、時空の上に存在するモノであることは変わらない。物体に対して働く時間の不可逆性に該当しないだけに過ぎない。本来精神が存在すべき時間とは違う位置に存在することになる。それを引き止めているのが、器である人間の肉体だ。しかし、その器の生命活動が停止すれば、精神は解放され、あるべき時間に引き戻される筈だ。しかし、その始点となった時間に戻っても、その肉体がその直後に死亡している可能性は十二分に考えられる。俺の推測では、この精神には生命活動に関わる一切の本能も含まれているからだ。そして、この可能性は俺にも中沢菜々にも該当する。俺は、装置の実行する都合上、実行時に生身を地獄と表現できる地球上に晒した。岩倉氏の話によれば、中沢菜々も始点は交通事故に遭った瞬間だった。これは憶測だが、憑依の始点にするには、精神を引き止めている肉体がなくならなければならない。つまり、肉体が死亡した瞬間にのみ精神は時間移動が可能となる」

「じゃあ、菜々君はもう戻れない？」

「否だ。俺がやるうとしてるのは、別の方法だ」

「別の……！ まさか、改めて憑依をするのか？」

「肯定だ。流石だな、賀集。俺の本来の肉体が、始点の瞬間に死亡しているならば、同じ時間の別の人間に憑依すればいい。ま、この大正明治という人間は死亡するのだから」

「そんな……」

話を聞き愕然とする賀集に大正はニヤリと笑った。

「なにを絶望している？ お前は中沢菜々を生かしたいのだろうか？ だったら、簡単じゃないか。お前には丁度いい器がある。岩倉氏がやろうとしたことと同じさ。岩倉ゆきの肉体に中沢菜々の精神を移してやればいい。そして、お前は彼女との縁談を進めればいい。愛しているのだろうか？ 中沢菜々を！」

大正は興奮した口調で口を大きく開き、詰め寄り賀集に言った。

しかし、賀集は拳を握り締め、言い返した。

「違う！ そんな方法は間違っている！ それならば、自分は彼女を生かす方法を考える」

「それは不可能だ。俺の見解は医師と同じだ。彼女は、この時代の医学では治すことのできない病を患っており、その命は来週までもたない。そして、彼女の精神は時の彼方へと消え去る。彼女を救う方法は、他にない」

「それでも！ それでも自分はそんな人の道を外れたことをしたくない！」

「人の道か……なんともエゴに満ちた台詞だ。それはお前が罪悪感にさいなまれる余生を過ごしたくないだけの話だろう。俺にはわかる。お前が本当は何を望んでいるかを。そして、俺にはそれを叶える術がある」

大正は賀集に詰め寄った。その二つの黒い瞳に映る賀集の喉元がゴクリと音を立てて動いた。

その反応を見て、大正は勝ち誇った笑みを浮かべた。

「そつだ。自分に素直になれ。何を望み、何をしたい？ 俺はそれを叶えてやろう！ 共に装置を直そう！」

「じ、自分は……………」

賀集が震える唇を動かし、言葉を発する。しかし、その先の言葉を発する前に、甲高い声が彼らの耳に飛び込んだ。

「望まないわ！」

二人は驚いて声のした階段の方を見た。

「菜々君……………」

賀集は声を漏らした。階段の昇降口の前にいたのは、菜々であった。

菜々は青白い顔でふらつきながらも、瞳には生気をみなぎらせて、一歩ずつ二人に近付いていく。

「私は、そんなの望まないわ。もう私の、中沢菜々の体が無い？ だったら、私はこれで満足よ。このまま岩倉なな子として死ぬわ。ゆき姉を巻き込ませはしない！ ゆき姉は賀集さんとこれから幸せになるの！ あんたの勝手にはさせない！」

そして、賀集の横にまで歩いて行った菜々は、心配して手を肩に添えようとする賀集の手を払うと彼の頬を思いつきり叩いた。軽快な音が周囲に響いた。

熱を帯びた頬に手を当てて賀集が菜々を見た。菜々は、両目に溢れんばかりの涙を溜めていた。

「何やってるのよ、賀集さん！ なに、こんな奴の口車に乗りかけているのよ！ 意識無くしてても、ちゃんと聞いていたんだからね…………… 助けてくれてありがとう。…………… でもね。私は、賀集さんというだけで、十分に幸せよ。もうこの一生に後悔のないくらいに！」

そして、菜々は大正を見た。

「あなた、声が大きすぎよ？ その話、地下実験室にも届いていたわ。お兄さん、私よりも青い顔で安心して、私が出て行くのも気にせずに座り込んでいたわ。騙されていたことに気づいたのだから当然ね」

菜々の話を聞いて、大正は舌打ちをする。

「ふん、今更あんなシスコン男は用済みだ。賀集、俺はここを去る。」

お前たちは自由に残された時間を過ごすがいい。ドイツやアメリカ、ロシアに行けば、岩倉のような人間は他にもいる。……それとも、俺を止める術をお前たちは何かできるのか？ 正義を講じて、客観的には犯罪だ」

「……………」

「卑怯者……………」

黙ってみつめる賀集と、憎らしく呟いた菜々を嘲笑いながら、大正は二人の横を通りすぎ、階段に向かう。二人に、彼を止めることは出来ない。

大正が階段を下りていく。その背中が二人の位置から見えなくなるうとした時、発砲音が階段から響いた。そして、落ちる様に見えるなくなる大正の体。

「……………」

賀集と菜々は顔を見合わせ、慌てて階段へ駆け寄った。

階段には鮮血を流して倒れた大正と、銃口からまだ硝煙を漂わせた拳銃を構えた九胤の姿があった。

「そんな……………」

「九胤さん！」

声をかけた二人を見上げると、彼はか細く笑うと虚ろに呟いた。

「なな子、今そっちに行くよ」

彼は銃口を自らのこめかみに向けた。

「よせ！」

賀集が叫んだ時には、彼は引き金を引いていた。

階段に銃声が響き、二つの死体が転がった。

数日後、賀集は岩倉邸の菜々の部屋にいた。床にっていた菜々に代わり、賀集が警察に事情を説明した。勿論、未来などの内容は伏せ、この事件は研究にとり付かれた研究者二人の凶行として幕を引いた。

病状が落ち着いていた菜々であったが、今朝から容態が急変し、

ゆきからの連絡を受けた賀集が駆けつけたのはつい数分前であった。

「もう……長くは、ないみたい」

「……………」

力なく笑う菜々に、賀集は何も言えず、その手を握った。それしか思いつかなかった。

「あー……………頭がぼーっとしちゃって……………駄目ね」

「喋るな」

「ううん、言わせて」

菜々は賀集の制止を拒否し、ゆっくりと言う。

「空想未来小説……………書き上げて……………くれて……………ありがとう」

「ああ」

「ねえ……………賀集さん」

「なんだ？」

「もし……………大正の言っていたことが間違いで……………私が生きていたら、……………あの約束……………メル友に……………なるって約束……………果たしてね」

「ああ、わかった」

賀集が言つと、菜々は涙をうつすらと流し、頷いた。

「うん……………」

そして、微笑んだ少女は、そのまま息を引き取った。

享年17歳。岩倉なな子として、その少女は葬られた。

跋・納め口上

その夜、江戸川区内にある俺の勤める病院の処置室では、数十分前に救急搬送された患者の蘇生処置が行われていた。

患者は、中沢菜々。偶然にも担当した俺の妹と同じ年の17歳の女子高校生であった。

「先生、まもなく限界時間です」

時計を確認した看護師の女性が、胸骨圧迫心肺蘇生法を患者に続ける俺に告げた。

「わかつている！ 電気は？」

額から汗を流しながら胸骨圧迫を続ける俺は声を荒げた。彼女はチャージが完了した電気ショックを一瞥するが、俺に言う。

「しかし、既に一度使用しています。患者は頭部を強打しています。万が一、これで障害が残ってしまったら………」

「俺を信じろ！ 俺達はこの子の将来を含めて救うんだ！」

「……わかりました！」

俺の必死な目を見て、彼女は運命を俺に託す決心をした様だ。

彼女は知っていたのだろう。俺の妹はかつて救命処置の遅れで一命をとり止めたものの、今も障害を残している。それはAEDが普及する前であった。一次救命でAEDがあれば避けられたことであったということも知っていた。私情を仕事に持ち込むのは良い事とは言えないが、俺は患者を蘇生させたいという強い思いを持って今、この患者に向き合っていた。

そして、それは彼女も理解したのだろう。彼女は、俺に電気ショックの端子を渡した。その目は、俺と同じ、脳裏に過ぎる全てのことを受け入れる覚悟をした者の目であった。

俺は彼女の覚悟と共に端子を受け取った。

「離れて！」

俺は注意を促すと、電気ショックを患者に行った。

刹那、患者の体は反射的に弾んだ。そして……。

一ヶ月半後、残暑が続くある日、都内の一角にある墓地を私は喪服を着て歩いていった。

墓地を管理する寺の住職に教えてもらった墓所へ、私は位置を確認しながら進んだ。日差しは深めに被る黒いツバ付きの帽子で防げているが、暑さから逃れることはできず、じんわりと滲み出た汗が首筋を伝う。

「あ……ここだ」

私は目的の墓を見つけ、立ち止まった。墓石は他の墓に比べて一段と年季が入っており、苔によって薄っすら緑色に変色している。

私は墓石に水をかけ、白く粉になった線香のカスと、茶色に萎れた菊、リンドウ、百合の花を捨てると、新たに線香と花を供え、墓前で手を合わせた。

墓石に刻まれた文字は、歳月の移ろいで読みにくくなってきている。岩倉家之墓と書かれている。

「……見つけるのに時間がかかったわ。ごめんね。……でも、私の命日に間に合ってよかった」

手を合わせて俯いていた私は、顔を上げて墓に眠るなな子さんに言った。

私は、中沢菜々。そして、ここに眠る岩倉なな子も短い間ではあったけれど、私だった。

心肺蘇生処置は成功し、私は死の淵から蘇った。障害も奇跡的になかったけれど、退院までに時間を要し、更に自宅療養も続き、実際に岩倉邸の場所を訪れることができたのは事故から一ヶ月以上が経過してからだだった。

岩倉家は、地下鉄白山駅から歩いて直ぐの場所にあった。しかし、すでに岩倉邸は無く、代わりにマンションが建設されていた。周辺で聞き込みをしたものの、戦前の、しかも大正時代のこととなるとその存在すら知る人はいなかった。

しかし、周囲の寺を片っ端から聞きまわった末、空襲で焼けて移築した寺が古い名家の墓をいくつか管理していたという情報を得て、そこに電話で確認すると確かに移築した墓の一つに岩倉家の墓があるという返答があったのだ。

そして、私が岩倉なな子として死去した命日である今日、この墓を訪ねた。あえてこの日を選んだのは、僅かな期待があった為だ。しかし、寺の人に聞くと、不規則に現れる中年女性が花と線香を供えて直ぐに帰る以外に、この数年間墓を訪ねた人間はいないという。

「……やっぱり、生きてる訳ないわよね。賀集さん、あなたもそこにいるの？ 賀集さんに話したいことがあったんだよ。……賀集さんのお陰で、夢ができたんだ。私、編集者になる。……また、一緒に小説を作りたかった」

墓石に手を添えて呟くと、じわっと目頭が熱くなるのを感じた。

「また……来るわ」
手の甲で涙を拭くと、私は笑顔で言った。そして、桶に残った水を流すと、それを持って墓から立ち去ろうと身を翻した。

「え……」
陽炎で歪むものの、足はあった。茶色の杖をついた老紳士がそこに立っていた。

「まさか……」
私が声を漏らすものの、蝉時雨にかき消される。老紳士は、黙って皺が深く刻まれた片手を自らの懐に入れた。

彼が懐の中から抜き取った右手の中には、最新機種の携帯電話が納まっていた。

優しく微笑んだ彼は、小さい穴が開いた口をゆっくりと動かした。しわがれた声が私の耳に届いた。

「約束を果たしに来たよ」

「終」

跋・納め口上（後書き）

納め口上

斯くして長い時間を隔てて再会を果たした、中沢菜々と賀集一喜、岩倉なな子死した後、賀集一喜の半生は、岩倉ゆきとの行く末は、此れ如何に。然れど、誠に残念ながら此れにて、空想未来小説の閉幕と相成ります。本編中にて語れず仕舞いとなりました事柄ではありませんが、中沢菜々が岩倉なな子の体に如何なる理由で憑依したか、大正明治が気付くことのできず死したこの謎。此れこそ賀集一喜の半生を紐解く手がかりとなります。手がかりはもう一つ御座います、それは序と跋を拝読して頂きました皆様ならば、既に御承知の事でしょう。これより詳しくは、是非皆様の想像にて納めて頂きたいと、作者よりお願い申し上げます。

それでは、まいごご拝読誠に有難う御座いました。また何処かでお会いいたしますその時まで、失礼つかまつります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5395n/>

空想未来小説

2010年10月8日12時13分発行